

ハイデガーと反ユダヤ主義

奥 谷 浩 一

要 旨

世界的な名声をもつ哲学者ハイデガーが1933年からドイツ第三帝国が崩壊した1945年までナチ党員であったことは、現在ではよく知られている。しかし、彼がどの程度までナチに関与したのか、どの程度にまで自分をナチズムに同化していたのかという問題にかんする論争にはいまだに決着がつけられてはいない。特に問題なのは、およそ600万人といわれるユダヤ人を絶滅収容所のなかで虐殺するという人類史上空前絶後のホロコーストを行ったナチの蛮行を支えた反ユダヤ主義にたいして、ハイデガーがいかなるかかわりをもっていたかである。彼がヒトラー流の狂信的な生物学的・人種的な反ユダヤ主義の持ち主でなかったことは確かである。しかし、ナチ時代のハイデガーの言動をつぶさに分析すれば、ある一定の範囲内において、彼もまたある種の反ユダヤ主義を抱いていたことが了解される。

本論文は、反ユダヤ主義の起源と歴史、ナチの反ユダヤ主義思想などを考察しながら、このことを論証したものである。

キーワード：反セム主義、ホロコースト、反ユダヤ主義の神話、公務員職再建法

目 次

はじめに

第一章 反ユダヤ主義の起源と歴史

第二章 ヒトラーとナチスの反ユダヤ主義

第三章 ハイデガーに反ユダヤ主義はあったのか

- (1) 学長就任以前のハイデガー
- (2) 学長時代のハイデガー
- (3) フッサールにたいするハイデガーのふるまい
- (4) ハイデガーはなぜユダヤ人教授を擁護したのか
- (5) 1934年夏学期の「論理学講義」

結論に代えて

はじめに

21世紀に入っても、ハイデガー・ナチズム問題にかんする論争はますます盛んに続いており、

当分こうした状況は止みそうにない。ハイデガー・ナチズム問題とは、世界的な名声をもつ哲学者マルティン・ハイデガーが、人類史上最も残忍で非人間的な権力犯罪を行ったナチ党（正式には「国民社会主義ドイツ労働者党」と称する）と何ゆえに接点をもちえたのか、という問題のことである。つまり、20世紀を代表すると言われる哲学者ハイデガーが、およそ600万人ものヨーロッパのユダヤ人を彼らがただユダヤ人であるという理由だけで殺害し、ひとつの民族を丸ごと地上から消滅させようとした、恐るべきホロコーストを実行しただけでなく、第二次世界大戦を引き起こしておよそ5000万人にも及ぶ死者を出すきっかけを作り出したあのナチ党とナチズムになぜ関与しえたのか、この関与はいかなる根拠にもとづいていたのか、そしてハイデガーのナチ関与は今では疑う余地のないものであるとしても、その関与の程度と範囲はいかなるものであったのか、が今もなお激しく論じられているのである。

第二次世界大戦後、ハイデガーの弟子であり、ナチ時代はアメリカ合衆国に亡命していた哲学者ヘルベルト・マルクーゼは、ハイデガーに手紙を書いたさいに、哲学とナチズムとは両立しないと明確に述べた。マルクーゼの言うことはわれわれにとっても正しいように思われるが、そうだとすれば、なぜハイデガーが自らの思想をナチズムと両立させていたのかが、ますます切実な疑問として提起される。このハイデガー・ナチズム論争のなかで、しばしば焦点となる問題のひとつとして論じられているのが、ハイデガーがはたして反ユダヤ主義（反セム主義＝Antisemitism）者であったのかどうか、もしそうであったとすれば、それはどのような質と程度においてそうであったのか、それはヒトラーとナチ幹部たちのそれと同じでないとしたらどう違っているのかという、一連の問題である。ハイデガー・ナチズム論争のなかでは、ハイデガーがヒトラーやアルフレート・ローゼンベルクが主張して止まなかったあの生物学的・人種主義的反ユダヤ主義に与したわけではなかったのだから、ハイデガーはナチではなかったのではないか、あるいは少なくとも普通の意味でのナチではなかったのではないかというような議論まで登場していることを見れば、ハイデガーと反ユダヤ主義との関係の問題に決着をつけることは、どうしても必要なことだと思われる。本論考があえて改めてこのテーマを取り上げるのも、こうした理由からである。

ハイデガーがナチ党員でありながらも、ヒトラーの『わが闘争』やアルフレート・ローゼンベルクの『二〇世紀の神話』とまったく同一の意味において反ユダヤ主義であったとは言えないということは確かである。私が管見する限り、ハイデガーの公刊された著作だけでなく、彼の生前中には公刊されなかった『哲学への寄与』のような著作においても、あからさまな反ユダヤの言辭は確認されえない。むしろ、『哲学への寄与』では、必ずしも明確にというわけではないにしても、民族主義や人種主義的思想にたいして距離を置いているように解釈される箇所さえ存在する。しかし、ハイデガーがヒトラーやローゼンベルクのような狂信的な生物学的・人種的な意味における反ユダヤ主義者ではなかったということは、彼が反ユダヤ主義者でなかったことを意味するわけではないであろうし、彼がナチズムに加担したことを免罪すること

になるわけでもないであろう。人種的・生物学主義的な意味における反ユダヤ主義だけが反ユダヤ主義ではなかったのだとすれば、それでは反ユダヤ主義とはいったい何なのか、それはどのように定義されるべきなのか。そして、こうした定義に照らして見るならば、ハイデガーははたしてどの程度において反ユダヤ主義者であったのであろうか。

第二次世界大戦末期においてドイツ第三帝国の敗北の迫る1944年4月2日、ヒトラーは総統大本営で自らの側近に次のような談話をを行ったという。「土足で踏みつけられたドイツ民族は、その国家的な無力の状態の中であって、われわれが与えた人種理論の法則を高くかけ通すために、つねに努力すべきであろう。道徳的にますますユダヤ人の病毒の犯されている世界では、この毒に対して免疫性をもった国民のみが、最後には強者として君臨するであろう。かく考えて見れば、私がドイツと中部ヨーロッパからユダヤ人を根絶やしにしてしまったことに対して、人々は国民社会主義に永遠に感謝するであろう。」⁽¹⁾これは彼が自殺する28日前のことであった。そして、ヒトラーが自殺する前日に、彼の一番の側近であっただけでなく彼亡き後のナチ党の後継者に指名しさえしたマルティン・ボルマンに後述したという彼の政治的遺書の第一部には、こう書かれている。「あの戦争 [第二次世界大戦のこと一筆者] はひとえに、あの国際的政治家たち、すなわち自分自身がユダヤ系か、あるいはユダヤ人の利益のために働いていた国際的政治家たちによって欲せられて引き起こされたものである。何世紀が過ぎ去ろうとも、われわれの都市や芸術的な記念の建造物の廃墟からは、われわれにとって忘れることのできない戦争のすべてについて究極の責任を負うべき民族に対する憎しみが、つねに新たに生まれてくるであろう。すなわち国際ユダヤ民族と、それに手を貸している国民に対する憎しみが！」⁽²⁾さらに政治的遺書の第二部の結びの言葉にもこうある。「なかんずく、余は国民を指導する人々ならびにその指導のもとにある人々に対して、人種法の厳密な遵守、ならびに世界のすべての国民に害毒を及ぼしているもの、すなわち国際的なユダヤ人集団に対する仮借ない抵抗を続けることを義務付けるものである。」⁽³⁾

これらの反ユダヤ主義信念は、ヒトラーが1925年と1927年に出版した『我が闘争』で展開したそれと寸部も違わず同一である。東方に生活空間を求めて武力による侵略戦争を遂行するためにドイツ国民を駆り立て、その過程でおよそ600万人を超えるユダヤ人を虫けらのように殺害して憚ることを知らなかった人物が、もはや命運尽き果て、自死のまぎわになってまでなお、第二次世界大戦の開戦の責任が自らにではなく、ユダヤ民族の国際政治家にあり、世界のすべての国民に害毒を及ぼしているものがほかならぬユダヤの血であるという狂信的思想を抱き続けていたということは、いったい何ゆえなのであろうか。ドイツの独裁者に登りつめた人物は、何ゆえにまったく事実を反する狂信的な考えを生涯にわたって抱き続けたのであろうか。ヒトラーをこうした狂信にまで駆り立てたところのものはいったい何であったのか。バッハやベートーヴェンを生み、レッシングやシラーやゲーテを生んだ学問と芸術の国ドイツで、またカントに始まるドイツ観念論によって哲学思想のうえでフランス革命を成し遂げたとされる哲学の

国ドイツで、彼らの最良の哲学的遺産の継承者であるべき哲学者ハイデガーが何ゆえに、真実を直視する能力をもたず、自死のまぎわにいたるまで狂信を抱き続けた独裁者に共鳴し、ナチズムという主義主張を自らのうちに同化しえたのか。

かつてユルゲン・ハーバマスは「ハイデガーの反ユダヤ主義はありふれた文化的性質のものであった」と述べたことがある⁽¹⁾。彼の言葉に従えば、反ユダヤ主義のなかにも文化的な性質の反ユダヤ主義とそうでない性質の反ユダヤ主義があるということになるが、ハイデガーの反ユダヤ主義ははたして文化的性質の反ユダヤ主義ということに尽きるのであろうか。文化的性質の反ユダヤ主義とはいったいどのようなものを指し、またそれは生物学的・人種の反ユダヤ主義とどのように関係するのであろうか。さらに文化的性質のユダヤ主義は、あのアウシュヴィッツ=ビルケナウを典型とする絶滅収容所におけるホロコーストという、人類史上まれに見る残虐行為と関係しないのかどうか、また関係するとすればそれはどの程度において関係するのであろうか。

本論文においては、これらの諸問題をたえず念頭に置きながら、ハイデガーと反ユダヤ主義との関わりについて考察し、一定の結論を得ることにしたい。

第一章 反ユダヤ主義の起源と歴史

ヒトラーとナチズムに典型的に見られる反ユダヤ主義とやがてホロコーストにつながるその急進化は、当時ヨーロッパに広く存在した、ユダヤ人にたいする差別と偏見の広がりを抜きにしては説明不可能である。なぜそれほどまでに反ユダヤ主義が広く蔓延していたのかという問題に答えるには、ユダヤ教とユダヤ民族がたどった歴史、紀元後1世紀末以降国家のバックアップをもたない民族として西洋に流入して西洋の諸民族、とりわけキリスト教を信仰する諸民族とのかかわりをもって以来の西洋の歴史的展開、そして西洋の歴史とともに変動または発展した社会的・経済的、政治的、および文化的基盤という広い社会的文脈に照らして解答されねばならない。ハイデガーと反ユダヤ主義との関係をさぐるために必要な限りにおいて、ここでヨーロッパにおける反ユダヤ主義の土壌と歴史を概観しておきたい。

まず、周知のように、キリスト教はユダヤ教のなかから登場したにもかかわらず、そしてユダヤ教と同じ一神教を信ずるという共通点がありながら、十字架上で刑死した人の子イエスを神および精霊と見なす点で、ユダヤ教とは本来その教義を根本的に異にする宗教である。ユダヤ教では、神はもともと人間を超越した存在でなくてはならないからであり、およそ偶像という目に見えるかたちで刻まれることのない存在だからである。そして、ユダヤ教の神は、アブラハムを始祖とするイスラエルの民族とともにあり⁽⁴⁾、彼らとのみ契約を交わし、彼らにだけ呼びかけ報償を与える排他的な民族の神であるのに対して、キリスト教の神はそもそもひとつの民族とその利害という限定を超えて、世界のすべての民族に改悛と福音を呼びかける神で

あった。例えば、パウロは書簡でこう述べている。「そこにはもはやギリシヤ人とユダヤ人、割礼を受けた者と無割礼の者、未開人、スキタイ人、奴隸、自由人の区別はない。キリストがすべてであり、すべての者のうちにおられるのである。」⁽⁵⁾

ユダヤ教とユダヤ民族の排他性・閉鎖性は、宗教上の教義に限定されはしなかった。出エジプトという民族の一大行動を率いた指導者モーゼの十戒は神とユダヤの人々との契約にはかならなかったが、モーゼの十戒は「創世記」、「出エジプト記」、「申命記」、「民数記」などに展開されているきわめて複雑多岐にわたる諸規則の中心をなすにすぎず、モーゼの法典以前にも彼らに伝承されていたさまざまな神の掟があった。古代末期にユダヤの学者たちが整理したところでは、神の掟は合わせて613あるとされ、そのうち積極的に守ることを要求する戒律は248であるのに対し、何事かを禁止する戒律は365もあったという⁽⁷⁾。これらのきわめて煩瑣な戒律がユダヤ民族の排他性に拍車をかけることになったのである。

モーゼの時代以前にも古くからあったと考えられるこれらの煩瑣な戒律のなかには、一定の科学的根拠をもっていたと見なされる食事や適正食品の諸規定や清浄にかんするタブーなどがあり、このほかに例えば男子が一定の年齢に達すると受けなければならない割礼の儀式がある。神が定めたとされるこれらの戒律を文化的風習の基盤としたことが、後にユダヤ民族がそのほかの民族との交わりを妨げたばかりか、彼らが毛嫌いされる口実となった。しかし、特にユダヤ民族とこれ以外の民族の社会的交流を妨げたのは、周知のように、モーゼの掟のなかにある安息日の制度であった。安息日とは、労働の疲れを癒す休日であるとともに、聖なる日でもある。やがてこの安息日という制度をもつことがユダヤ民族のアイデンティティをなすとともに、ユダヤ民族こそが神によって選ばれた民族であることの根拠とされて、ユダヤ民族とそのほかの民族の距離をさらに拡大することとなる。これらは、いわば反ユダヤ主義の萌芽的または即自的形態であり、やがて彼らが西欧社会に同化しようとするさいの大きな障害となる。

ユダヤ民族はじっとパレスティナに定住していたわけではない。彼らの多くは、すでに紀元前数百年前からパレスティナの地を離れて、ギリシヤ、ローマ、シリア、アジア、リビアなどの諸都市に定住し、その大部分が商業、仲買貿易、今でいう銀行などの仕事に従事していた。彼らのユダヤ民族としてのアイデンティティは、イスラム教徒にとってメッカがそうであるように、巡礼としてパレスティナを訪れることによって発揮された。ヨセフスによれば、エルサレムの没落のかなり前から、ユダヤ民族の4分の3がパレスティナ以外の都市に定住していたという⁽⁸⁾。この時代においては、反ユダヤ主義は主としてパレスティナやアレクサンドリアのギリシヤ人たちによって担われ、ギリシヤ対ユダヤという構図で展開されていたといわれる。ユダヤ教はキリスト教に改宗する以前のギリシヤ人の多神教の宗教とも相容れなかったのである。

しかし、ユダヤ民族のこうした状況にとってやはり決定的であったのは、ユダヤ人たちが紀元66年から128年からの二度にわたってローマ人の支配に対して反乱を起こした事件であ

る。最初の事件では、エルサレムに在住するユダヤ人とギリシャ人たちとの間の訴訟をめぐる民族的憎悪をきっかけとして起こり、エルサレムがローマ守備隊によって包囲されたあげく、神殿が破壊されて廃墟とされた。この反乱では、最後の砦であったマサダが陥落して、ここだけでおよそ一千名が玉碎し、全体としては少なくとも120万人が殺されるか、奴隷として売買されたという。二度目の事件は、ギリシャ崇拜で知られたローマ皇帝ハドリアヌスがエルサレムの廃墟の上にユピテル神殿を建設しようとしたことをはじめとするユダヤ教への圧迫が契機となった。コホバを指導者とするユダヤ人反乱軍は7年間ローマ軍と戦ったが、135年に鎮圧される⁽⁹⁾。このふたつの反乱とその失敗はもともとユダヤ人のなかに存在した離散的傾向を決定的に促進することになり、以後彼らは国家をもたない、言い換えれば、国家の庇護と後ろ盾をもたないさまえる民族となったのである。これ以後、祖国を失ったユダヤ人たちは祖国というより所を失ったからこそ、モーゼ五書を中心とするトーラーを自らのアイデンティティのより所とするほかに、トーラーを解釈し整理する律法学者であるラビがシナゴグに結集する信徒集団を指導するという形態の宗教に変身していくことになる。モーゼ五書の律法を神の掟として、絶対的なものとして理解するというユダヤ教の根本精神は、後に西洋の歴史の近代化との矛盾をさらに深刻に増幅するものとなっていく。

ユダヤ民族の世界的な離散という過程のなかで、ユダヤ教とキリスト教の間の分離もまた決定的になった。初期キリスト教は、イエスをキリストとして信仰する以外のほとんどすべての要素を自らのうちに取り込みながら、『マタイによる福音書』に典型的に見られるように、キリストの刑死にたいしてはユダヤ民族全体が罪を負うという考え方と、『ヨハネによる福音書』に見られるように、例えばユダヤ人にたいして「お前たちはお前たちの父である悪魔から出てきた者」⁽¹⁰⁾であるという言い方が結合して、民衆のレベルでキリスト教に特有な反ユダヤ主義を醸成していくことになる。もちろん、ユダヤ教とキリスト教の関係は複雑に絡み合っているが、初期キリスト教のみならずその後のキリスト教においても、金銭と引き換えにイエスを裏切って十字架へと送った弟子ユダがユダヤ人と同義語とされて、民衆のユダヤ人観の底流に、ユダヤ人が悪魔のイメージや裏切りや卑劣さの象徴として見られるということが存在し続けた。やがてローマ帝国内でキリスト教が国教となるにつれて、キリスト教に改宗しない頑固なユダヤ人たちが宗教的問題だけでなく、政治的な問題ともなる。歴史的に見て、キリスト教が必ずしもユダヤ教を異教として直接に迫害したわけではなくて、宗教としては黙認というかたちを取ることも多かった。しかし、その後の西洋の歴史においては、特に民衆のレベルで、時には流言蜚語にも影響され、またその時々、社会的諸事件に触発されるかたちで、異教のユダヤ人に対する反感と憎悪がしばしば、数々のユダヤ人迫害や差別、シナゴグへの襲撃、そして時にはポグロム⁽¹¹⁾と呼ばれる集団虐殺に発展していったのである。

キリスト教社会における反ユダヤ主義の伝統にかんしてもうひとつ考慮しなければならない点は、エルサレム神殿の破壊以後に世界に離散した彼らの社会経済的な特長である。前述のよ

うに、古代からさかんに海外移住を行っていたユダヤ人は、その大多数が基本的に商業取引を生業とする民族であった。奴隷制を基本とし土地と農業に依拠する古代と、領主と農奴によって構成されて基本的には自給自足の経済を原則とする中世の荘園および封建制の時代には、商業とこれを生業とする商人、なかんずく高利貸しはとりわけ敵意と憎悪をもって見られる場合が多かった。例えば、古典古代の奴隷制を代表する哲学者アリストテレスはこう述べている。「しかし、われわれが先に言ったように、取財術には二種あって、そのうちひとつは商人術であって、もうひとつは家政術の一部である。後者は必要欠くべからざるもので、賞賛されるべきものであるが、前者は交換的なものであり、非難されてしかるべきものである。なぜなら、それは自然に合致したのではなくて、人間が相互から財を得るものだからである。したがって、憎んで当然なのは高利貸しである。それは、彼の財が貨幣そのものから得られるのであって、貨幣がそのことのために作られた当のもの [交換という目的] から得られるのではないからである。なぜかといえば、貨幣は交換のために作られたものであるが、利子は貨幣をいっそう多くするものだからである。……したがって利子は取財術のうちでは実は最も自然に反したものである。」⁽¹²⁾ 「最も優れた国制をもつ国、すなわち、国制の基礎になっている原理から見て正しい人間ではなくて、端的に正しい人間を所有する国においては、市民は俗業民的生活も商業的な生活も送ってはならないことは明らかである。なぜかといえば、このような生活は賤しいものであって、徳とは相容れないからである。」⁽¹³⁾ 農業労働によらないこうした商業と高利貸しに対する軽蔑と憎悪は、キリスト教とその初期の教父たちにも継承された。

基本的に土地と農業に生活の基盤を置く古代と中世の経済社会においては、ユダヤ人が営む商業はこれと基本的に相容れないものであった。しかし、被支配者の側の民衆が土地に束縛された生活を営んでいたからこそ、ユダヤ人の商業活動は、ヨーロッパとアジアとをつなぐ唯一の架け橋として、少なくとも12世紀を迎えるまでは、きわめて大きな役割を果たしていた。こうしたユダヤ人の経済的役割から直接大きな利益を受けたのは、多くは王侯や高官・貴族であり、封建領主であった。ユダヤ人は教育を重んじて、勤勉で、識字率が高く、計算や財政管理にも秀でていたから、もっぱら東洋と西洋を媒介し希少物資を流通させる商人として活躍して財をなしただけではなくて、やがて国王や封建領主の収税人、財政管理人、または高利貸しなどとしてその時々社会構造のなかに浸透していった。ユダヤ人はこれらの支配者たちに庇護され、支配者たちもまたユダヤ人の経済的な力と財務能力を必要とした。宮廷の財務長官や金庫番がユダヤ人であり、民衆にたいする集金人や取税人もまたユダヤ人であるというような状況さえ作り出された。ユダヤ人たちが商業活動の対象としたものは、ブドウ酒、オリーブ油、金属および貴金属、絹、織物、香料、塩、毛皮などであり、そしてまた奴隷の売買であった。イスラムの勢力が盛んであった時代には、とくに奴隷の流通と売買を一手に引き受け、白人奴隷さえも売買したことが、ユダヤ人に対する恐怖心を西欧人に植え付けることになったといわれている⁽¹⁴⁾。

しかし、封建的な生産様式にいわば寄生するユダヤ人のこうした社会的地位は、彼らの寄生性ゆえに決して安定したものではなくて、しばしば支配者から財産を奪われて放り出されたり、あるいは支配者の支配的地位を経済的に支える存在として、民衆の側からすれば、支配者に代わって憎しみの対象となる場合があった。しかし、全体として見れば、少なくとも基本的に自然経済にもとづき交換それ自体が生産の目的とはならなかった12世紀までは、近代のようなユダヤ人に対する大規模な迫害が起こったことは少なかった。

交換経済と重商主義の発展、そして資本主義の興隆とともに彼らの状況は一変する。中世社会の交換経済が発展して次第に封建制そのものを揺るがし始めて、西ヨーロッパの人々もまた商業活動に活発に従事するようになり、さらにはルネサンス期をへて新世界の発見とともに西欧諸列強によって重商主義と植民地化とが世界的な規模で展開されるようになると、それまで商業活動を独占してきたユダヤ人との競合が生ずる。しかし、国家の後ろ盾を持たないユダヤ人が西欧人とのこの競合に勝てるはずもなく、彼らがそれまで維持し続けてきた経済的地位から排斥されるようになる。新しく登場した西欧人の商人階級の商業活動に太刀打ちできなくなったユダヤ人の多くは西ヨーロッパを去って、まだ農業経済と封建制度が色濃く残る、ポーランドを中心とする東ヨーロッパ・ロシア・トルコなどの諸国に移動して、彼らが伝統的に従事してきた商業・行商・金融などの職業をこれらの後進地域で維持し続けようとする。

西欧に残ったユダヤ人たちは国際的な商業活動からは排斥されて、差別と迫害を受けながらも、とりわけ大都市のなかでゲットーという隔離され管理された特定区域に居住して小さな規模で高利貸しをしたり、行商人をすることで生き延びた。ところが、西欧における資本主義の勃興とこれに規定された近代社会の成立とともに、こうしたユダヤ人の生活には西欧においてもまた東欧においても決定的な変化が起きることになったが、その背景にはさらにいくつかの要因がある。

そのひとつは、フランス革命のなかから身を起こしてフランス皇帝の座に着き、その後自らの血縁関係を用いてヨーロッパ諸国を支配したナポレオンが「フランス革命の申し子」としてユダヤ人にたいしては解放政策を取ったことである。ナポレオンは傑出した軍事力と指揮力によってヨーロッパ列強を服属させたが、このことはフランスよりもはるかに封建的な政治経済的体制の残る後進国に「自由・平等の精神」を移植し、拡大するという役割を果たしたのである。西欧ではユダヤ人を隔離してきたゲットーが開放されて、ユダヤ人はいきなり西欧社会の一員としてそのなかに入ってきたのであった。多くのユダヤ人は彼らの伝統的な宗教と生活習慣を変えることなく、西欧社会のなかで独自の地位を維持したが、キリスト教に改宗したりキリスト教徒と結婚して西洋の文化とキリスト教社会に自らを同化させる人々も数多く登場する。彼らのなかには、社会的・経済的に成功して富裕な中産階級になる人々が現れた反面、依然として西欧社会への同化を拒む人々も多く、こうした社会的状況がいわゆる「ユダヤ人問題」を生むことになる。

しかし、東ヨーロッパでは社会的状況はこれとかなり異なっていた。経済的に遅れており、それゆえにユダヤ人の主要な移動先となった東欧諸国においても、19世紀末になると資本主義化の波が押し寄せて、封建制度の経済的土台を揺るがし始める。東ヨーロッパにおいて資本主義経済の勃興と発展が進むと、ここでもユダヤ人は、その一部がかろうじて小工業労働者として資本主義の一翼を担うことができたものの、その多くは伝統的な生活スタイルを維持したままに東欧社会から追い出され、またしても新しい経済社会への編入を求めて、大量の零落した移民として西欧のベルリンやウィーンなどの大都市に流入せざるをえなかった。ヒトラーはまさしくそのウィーンで零落したユダヤ人たちと出会ったのである。

すでに述べたように、ユダヤ人たちとキリスト教徒との歴史的で複雑なかかわりは、西欧社会においては、カトリックであるかプロテスタントであるかを問わず、その民衆的なレベルでは、時には潜在的に時には顕在的なかたちで、たえず反ユダヤ主義を生み出す温床であり続けた。宗教改革者のルターが1523年に「イエス・キリストは生まれながらのユダヤ人であること」を書いて、すべてのユダヤ人がキリスト教徒たりうると呼びかけながら、後の1543年には「ユダヤ人とその虚偽について」を書いて、彼らに激しい反ユダヤ主義的言辞を浴びせかけたことはよく知られている。

こうした宗教上の諸問題とそこから生ずる確執に加えて、ドイツでは、いち早く近代化を成し遂げたイギリスやフランスに比べれば、市民革命の成功はおろか統一的国家さえ存在しなかったという後進的な状況があり、おそらくはその反動として、とりわけロマン主義的な文化的伝統のなかで、ドイツ国民を統合する象徴として「Volk（民族またはたんにフォルク）」という言葉が語られていた。例えば、カントに始まるドイツ古典哲学の流れにおいても、愛国的な哲学者フィヒテがそうであったように、ユダヤ人に対する対抗意識のなかで、または明確な反ユダヤ主義的思想のなかで、国民的な統合の鍵概念として「ドイツ民族」が叫ばれるような民族主義的伝統が存在し続けた。特にドイツにおいてこうした伝統はやがて、人種主義の宣伝家でヒトラーが愛読したパンフレットを書いたテオドル・フリッチュ、東洋学者のポール・ド・ラガルド、ドイツに帰化したイギリス人のチェンバレンらの人種主義的反ユダヤ主義の潮流と結びついていくことになった。とりわけチェンバレンがリヒアルト・ワーグナーのあのゲルマン神話を題材とする楽劇にも影響を与えたということは、反ユダヤ主義的な土壌が文化面でも広がっていたことを象徴的に示している。

最後に指摘しておかなければならないのは、すでにワイマール共和制の時期には勤勉で有能なユダヤ人のかなりの数が社会的・文化的に成功していたという事実である。ヴィストリッヒによれば、出版、報道、芸術、自由業、貿易、民間銀行、商業などの分野では、ほとんど不釣り合いなほどユダヤ人の成功者が多く、さらに1933年の時点で医師の11%、弁護士の16%をユダヤ人が占めており、ノーベル賞の受賞者を初め、学問や大学教授の世界でも優れたユダヤ人学者が輩出していたことは周知のことであった。一般のドイツ人にとって彼らは目立つ存在であ

り、これらの分野で職業を共にしていたドイツ人にとってもこうした成功したユダヤ人は嫉妬心や羨望の対象であったばかりか、ルサンチマン（怨恨感情）の対象でさえあって、これらの分野からユダヤ人が排除されることは、これと引き換えにドイツ人の地位の向上をも意味していたことは忘れられてはならないであろう。

ナチ時代の反ユダヤ主義を考える場合、ワイマール共和国の末期とヒトラー台頭の背景には、宗教上のユダヤ人嫌悪、成功したユダヤ人にたいする怨恨感情、大量に流入する零落したユダヤ人移民に対する憎悪など、さまざまな反ユダヤ的感情のアマルガムが存在したこと、これがヒトラーとナチスの反ユダヤ主義の支えとなり、さらには絶滅収容所につながるホロコーストを準備したことを肝に銘じて、その分析を進めなければならないであろう。

第二章 ヒトラーとナチスの反ユダヤ主義

ハイデガーとナチズムとの関係を語るさいに、とかく欠落しがちなのは、実際のナチズムがどのようなものであり、当時のドイツの社会状況のなかで現実にどのように伸張したのか、当時のドイツ国民がヒトラーとナチズムにたいしてどのような態度を取ったのか、そしてナチがユダヤ人に対していかなる蛮行を行ったのかという事実である。ハイデガーのナチズムとナチ時代の彼の思想の展開もまた、こうした社会的・文化的な背景と第三帝国の興亡という政治的なコンテクストとの深いかわりのなかで解明される必要がある。

ヒトラーとナチの人類史上類例を見ない反人間的な残虐行為の数々は、ハイデガー・ナチズムを論ずるにあたって、われわれの肝に銘じておかなければならない。

第二次世界大戦後の調査によれば、アウシュヴィッツ・ボルケナウやトレ布林カなどの絶滅収容所でいわば工場方式で殺害されたユダヤ人を含めて、ナチによるホロコーストの犠牲になったユダヤ人は600万人を超えるといわれる。統計資料によれば、ヨーロッパ全体のユダヤ人の三分の一が殺され、ドイツ国内ではいわゆる完全ユダヤ人、つまり少なくとも三人の祖父母にユダヤ人をもち本人がユダヤ教徒でもあるユダヤ人のほとんどの数に相当する52万人が殺害されたという。そのほかに、ナチ・ドイツのポーランド侵攻によってポーランドのユダヤ人300万人が殺され、同国の非ユダヤ人が300万人犠牲となり、また独ソ戦の勃発によって生じたおよそ300万人のソ連兵捕虜がナチによって意図的に餓死させられたという。ヒトラーによる東部への侵攻と世界大戦の開始は、ヨーロッパのユダヤ人をまるごと根絶やしにしようという意図をもって始められたとする歴史学者の見解も、あながち否定できないくらいである。ナチの犠牲となった人々は決してユダヤ人に限定されはしない。この時代の歴史研究者によれば、ジプシーもまたナチによって忌み嫌われ、ユダヤ人の虐殺とほぼ平行して1939年から1945年間に少なくとも25万人から50万人が絶滅収容所で殺害され、さらにそのほかに肉体的・精神的な障害をもった人々がナチの非科学的な優性思想の犠牲となり、およそ10万人が安楽死させら

れたといわれる⁽¹⁸⁾。これにさらに、ナチによって開始された世界大戦の犠牲者を考慮に入れば、ナチのこうした残虐行為はまさしく人類史上未曾有の蛮行というべきであろう。もしもヒトラー率いるドイツ第三帝国が崩壊する時期が遅れたとすれば、その犠牲者はさらに史上空前の数字に達していたであろう。

すでに述べたように、ユダヤ人に対する迫害や虐殺は、それまでのヨーロッパにおいても歴史上何度も存在した。しかし、ヒトラーとナチスがなぜおよそ600万人という史上空前の規模でユダヤ人を殺害できたのかといえ、その背景にはいくつかの理由がある。まず第一に、ヒトラーのような極端に狂信的な反ユダヤ主義思想をもち、およそ正確に政治経済の情勢分析をする能力もないような人物が国家権力を握って政治的独裁者となったこと、言い換えれば、このような人物に総統としての独裁的な権力を与えたことである。そして、独裁者ヒトラーのもとに整然と組織され、彼の命令に従って機能的に動く強力な官僚と警察の機構が形作られたことである。また、ドイツとその占領地域に張り巡らされた交通網と強力な輸送手段が存在したことも要因のひとつである。さらに、これらの官僚機構や交通手段を用いてユダヤ人虐殺を支えた広範な人々の存在も無視しえない。ナチ幹部の狂信的な生物学的・人種的な反ユダヤ主義を現実に工場方式で実行し、ユダヤ人をこうしたかたちで排除し抹殺することを許容したクルップ・コンツェルンやイー・ゲー化学会社などの大企業と大衆が広範囲に存在したことも見逃せない。そして最後に、チクロンBに代表される毒ガスの開発と絶滅収容所における殺人システムの建設を可能にした近代技術力の後ろ盾をあげなければならない。これらのいくつもの諸要因が複合的に作用して、あの空前絶後の反人間的行為が行われたのである。それは、決して近代以前には可能ではなく、ナチズムの独裁体制とこれを支えたドイツの民衆と近代技術があったからこそ可能になったのであり、そうして初めてヒトラーのような狂信と妄想を実際の虐殺へと現実化することができたのである。

ヒトラーとナチをこれほどまでのユダヤ人憎悪に駆り立て、何の罪もないユダヤ人を虫けらのように殺害できた理由は、いったい何であったのか。

ヒトラーは、1923年11月8日のミュンヘン一揆が失敗して獄中にあった時に口述したといわれる『我が闘争』のなかで、ユダヤ人についてこう述べている。「いったい、とりわけ文化的な生活のなんらかの形式において、少なくともユダヤ人が関わっていなかったであろうような不正や破廉恥があったか。そのような腫瘍物を注意して切り裂くとすぐ、腐敗しつつある体にたかる蛆虫のように、突然差し込んだ光で完全に目を眩ませられたユダヤ人がしばしば見出された。」「それは、民族が感染したかつての黒死病よりもいっそうひどいペストであり、精神的なペストであった。」「歴史的経験は恐るべき明瞭さで、アーリア人種といっそう劣等な諸民族とのどんな混血も、その結果として、文化の担い手の終結を招くということを示している。」⁽¹⁵⁾ 見られるように、ヒトラーはユダヤ人に対して劣等人種、蛆虫、ペスト、害虫、ばい菌、寄生虫、うその大名人、墮落の媒介者などと、ありとあらゆる悪罵を投げつけ、彼らを有害で駆除

すべき対象として描いている。また彼はこうも述べている。「毎日のパンのための闘争は、すべて弱いもの、病弱であり、より決断力に乏しいものを敗北させるが、他方では、雌をめぐる雄の闘争は最も健全なものにだけ生殖する権利を与えるか、さもなければその可能性を与える。しかし、闘争は相変わらず種の健全さと抵抗力を促進する手段であり、したがってその種の進化の原因であり続ける。」⁽¹⁶⁾ヒトラーの反ユダヤ主義は、ほとんど科学的に根拠をもたない妄想または狂信と言うべきものであって、ユダヤ人に対する憎悪と偏見は彼が生半可に理解したこうした皮相な社会ダーウィニズムによっていっそう激しさの度合いを増幅して表現されている。

ヒトラーに代表されるナチスの反ユダヤ主義の特徴は、第一に、遺伝的血統にまつわる「血」または「人種」の「神話」を彼らの反ユダヤ主義に導入したことである。ユダヤ人は常に汚れた劣等な人種として扱われ、これに対してアーリア人種だけが文化創造的で同時に科学・芸術・技術の優れた唯一の担い手とされる。しかし、そのアーリア人種の文化的創造性は、彼らがユダヤ人種と混血し、その劣等な「血」がアーリア人種のうちに入り込むにつれて破壊され、彼らが文化の担い手であることをやめる。過去の偉大な文化が減じたのは、こうした混血とそれによって人種の水準が低下した結果である。こうした血と人種の神話によれば、ユダヤ人はたとえばキリスト教に改宗してキリスト教の社会と文化に完全に同化したとしても、決して許されはしない。彼らはその血と人種のゆえにどこまでも迫害されざるをえない。これはどこまでもユダヤ人を迫害し、やがて地上から消滅しなければならないことを宣言する神話でもある。これに加えて、こうした途方もない神話をふりまくことは、ナチにとっては、もうひとつの大きな利点と結びつく。それは、ドイツの民族としてのアイデンティティを人種的に鼓舞することで、ドイツ民族としての一体性を獲得することができるという利点である。彼らによれば、アーリア人こそが「民族共同体」を形成し、これに献身することができる民族なのである。なお、ヒトラーは「ユダヤ人はつねに一定の人種的特性をそなえた民族だったのであり、決して宗教だったのではない」⁽¹⁷⁾と述べたが、これもまったく事実ではない。複合民族であるアメリカ人やトルコ人が人種的に定義できないのと同様に、ユダヤ人もまた人種という観点からは定義できないのであって、後にナチの人種局がその定義に失敗して民族的な定義に逆戻りせざるをえなかったことがその何よりの証明である。アーリア人種とて同じことである。

ナチスが作り出した第二の神話は「ユダヤ資本主義の神話」であった。ヒトラーはここでもユダヤ人に歴史的に存在した汚い高利貸としてのイメージを利用して、彼らをドイツの国民経済の破壊者に仕立て上げる。「彼らはもちろん真に国民の利益になる経済の基礎をますます根本的に破壊する。彼らは株式という間接的手段で国民生産の循環過程に忍び込み、これを金で自由になる……暴利の対象にしてしまい、そのことによって企業体から個人的な所有権の基礎を取り上げてしまう。」⁽¹⁸⁾「彼らは国民労働力の所有者になる。あるいは、それほどまでではないとすれば、国民労働力の監督者となる。」⁽¹⁹⁾そしてそのうえで、ヒトラーはユダヤ人によ

るドイツ経済支配の野望と、ワイマール体制および議会制民主主義の維持とを短絡的に結びつける。「だが、この段階でのユダヤ人の究極目標は、民主主義が勝利することである。言い換えれば、彼らが理解するところでは、議会主義の支配である。民主主義は、たいていの場合、彼らの要求に一致する。なにしろ、それは人格を排除し、その代わりに愚鈍、無能、そしてこれに劣らず臆病、これらで構成されている多くのことを持ち込むからである。」⁽²⁰⁾ こうした神話を作り出すことで、ヒトラーはドイツの国民経済に対する大資本および大企業の責任とこれに対する民衆の不満とを、民主主義と同様に、ユダヤ人に転嫁することができた。ドイツの大資本にとってヒトラーのこうした反ユダヤ主義が大いに利用価値があったのは、当然のことである。

次に、ヒトラーは「ユダヤ資本主義の神話」を「ユダヤ国際主義の神話」へと拡大する。そのさいに、今では反ユダヤ主義者が謀略によって書いたことが明確になっている「シオンの賢人の議定書」なるものを利用して、ユダヤ人がドイツ国内の支配ばかりでなく、ユダヤ資本主義による世界支配と非ユダヤ民族の隷属化をもたくらむ陰謀家集団であると見なす。ヒトラーにとっては、「ユダヤ的」という概念と「国際主義」という概念とは同義語であり、これらは区別せずに用いられた。もちろん、ドイツ民族主義にとっては、「国際主義」はこれと決して両立することのない不倶戴天の敵であった。ヒトラーは例えばこう述べている。「今日フランスでは以前にもまして、金融およびこれを支配しているユダヤ人の意図と、ショーヴィニズムの立場に立った国家主義的政策という願望との間に本質的な一致が見られる。しかし、まさにこの同一性のなかに、ドイツにとっての計り知れぬ危険がある。……自己のなかでますますニグロ化しつつあるこの民族は、ユダヤ人の世界支配という目標と結びつくことによって、ヨーロッパの白色人種の存続にとっては、身に迫る危険を意味する。」⁽²¹⁾

ヒトラーのとどまるところを知らない狂信と妄想は、さらに「ユダヤ国際主義の神話」を国際共産主義運動、つまりボルシェヴィズムまたはマルクス主義と結びつける。これは「ユダヤ唯物主義および共産主義の神話」といってよいであろう。「ただたんに世界の経済的征服につきることなく、世界の政治的な隷属化をも要求する彼らの闘争の究極目標にかんして、ユダヤ人はマルクス主義の組織化を半分に分ける。……それはつまり、政治運動と労働組合運動である。」⁽²²⁾ 「ロシア・ボルシェヴィズムは20世紀において企てられたユダヤ人による世界支配のための実験と見なされなければならない。」⁽²³⁾ 確かにロシア革命の指導者たちには、トロツキーやジノヴィエフなど、ユダヤ人革命家が不釣り合いなほどに多く、またドイツではスパルタクス団にローザ・ルクセンブルクがいたし、社会民主党の指導者たちにもミュンヘンのアイスナーやワイマール共和国の閣僚にもラーテナウらがいたことは事実である。しかし、この事実を、共産主義またはマルクス主義と結び付けて、世界支配をめざすユダヤ人の国際的組織が存在するとすること自体、まったく根拠のない狂信と妄想以外の何ものでもない。こうした神話を作り出すことは、社会主義政党に指導される労働者運動にくさびを打ち込んで彼らを分断し、

ナチの正式名称である「国民社会主義ドイツ労働者党」に見られるような偽装した「社会主義」および労働者主義的主張と相まって、労働者たちを反共主義・反マルクス主義へと誘導しようとする姿勢を色濃くもっていたが、このこともまた、ドイツの大資本にとっては願ったり適ったりだったであろう。

ところで、今から見れば途方もないヒトラーのこうした妄想は、ナチ時代のハイデガーにとってまったく無縁とはいえない。例えば、ハイデガーが1935年に講義し、第二次世界大戦後になって公刊した『形而上学入門』には、次のような箇所が散見されるからである。「このヨーロッパはたえず、どうしようもない盲目に陥って自己自身を刺し殺そうとしているところであるが、今日一方ではロシア、他方ではアメリカとの間に大きく挟まれている。ロシアとアメリカは、形而上学的に見れば、両方とも同一である。これらは猛威をふるう技術と平均人の底なしの組織化との絶望的な狂乱状態だからである。」⁽²⁴⁾「これらすべてのことは、歴史的な民族としてのこの〔ドイツ〕民族が、自己自身とそうすることによって西洋の歴史とを、それらの将来の生起の中心から取り出して、存在の諸力の根源的な領域のうちへと置き入れるということをそれ自身のうちに含んでいる。」⁽²⁵⁾「ヨーロッパにおいて大地の運命が決定されるのであって、そのさいヨーロッパ自身にとって、われわれドイツ人の歴史的現存在が中心をなしていることが明らかとなる。」⁽²⁶⁾「マルクス主義が極端なかたちでそうしたように、精神を知性として理解するならば、その場合には、マルクス主義に反対して、精神すなわち知性は人間的な現存在の作用する諸力の秩序のうちでは、常に健康な身体的有能さと性格に従属させられなければならないというのは、しごくもっともである。」⁽²⁷⁾「したがって、存在者そのものを全体として問うことは、つまり存在の問いを問うことは、精神を覚醒させるための、それゆえに根源的世界のための、そしてそれゆえに世界の暗黒化の危険を制御するための、それゆえに西洋の中心であるわれわれドイツ民族の歴史的使命を引き受けるための本質的な根本諸条件のひとつである。」⁽²⁸⁾ハイデガーのこれらの叙述のなかには、反ユダヤ的な人種主義こそ認められないものの、「世界の暗黒化」、ドイツ民族主義、反アメリカニズム、反マルクス主義、反ロシア主義＝反ボルシェヴィズムなどの諸要素が明らかに見られるのであって、表現の仕方こそ異なりはするものの、先に掲げたヒトラーの『我が闘争』の叙述にほぼ内的に対応するものであると見て差し支えないであろう。

ところで、ヒトラーのユダヤ人に対するきわめて憎悪と狂信に満ちた反ユダヤ主義がそのままナチズムまたは国民社会主義のそれであったわけではない。たとえナチズムが、多くの歴史家が証言するように、いかにそれが無定形な臆見と要求の寄せ集めであったとしても、その最大公約数または共通分母となるものがやはり存在するのであって、われわれはこれを1920年に定式化された「ナチ党綱領25カ条」に求めることができる⁽²⁹⁾。

このナチ党綱領はいくつかの小さなブロックに分類されるが、第一次世界大戦の戦敗国であるドイツ国民にとって当時最も重要でありまた多くの国民の不満を吸引する力となったのは、

第2条「われわれは、他の諸国民とドイツ民族との平等権とヴェルサイユおよびサン・ジェルマンの講和条約の破棄とを要求する」であったであろう。その次に重要なのは、第1条「われわれは、諸国民の自決権にもとづき、すべてのドイツ人が大ドイツ国家を目標として結集することを要求する」に始まる民族主義的スローガンのブロックである。これと密接なかかわりをもつのが、第3条「われわれは、ドイツ民族の食料供給と過剰人口の移住のために、領土と土地（植民地）を要求する」である。

ここにすでに、たとえ軍事力を行使しても領土と居住地の拡大をなしとげようとするナチズムの基調低音が奏でられており、この要求がその次のブロックを構成する反ユダヤ的スローガンと組み合わせられている。例えば、第4条は「民族同胞である者に限り、国家公民であることができる。信仰の如何を問わず、ドイツ人の血統をもつ者に限り、民族同胞であることができる。したがって、ユダヤ人は民族同胞とはなりえない」がそうであり、第6条「国家の執行および立法の決定権は国家公民にのみ与えられる」もそうである。これにさらに、第7条「国家の全人口の食料を満たすことが不可能な場合は、他の諸国民にぞくする者（非国家公民）はドイツ国から追放されるべきである」が続く。つまり、第ドイツ国家建設という民族主義的要求と不可分に、ユダヤ人から公民権ばかりか土地と財産をも剥奪しようとする要求が結合しており、ここにすでに東部地域への領土拡大という第二次世界大戦への布石があり、東部地域占領に伴って生ずるユダヤ人の問題の最終解決としての人種的抹殺への布石がある。ヒトラーが権力掌握後になしとげたのは、これらの要求が秘めていたたんなる潜在的な可能性をきわめて暴力的なかたちで現実性へと転化したことであるにすぎないといえよう。

そして、第7条「何ら性格と能力を考慮することなく、たんに政党的見地によってのみ地位が占められる腐敗した議会経済に対して、われわれは抗争する」というスローガンに見られる議会主義と民主主義にたいする敵対と蔑視、そして「われわれは唯物主義的世界秩序に奉仕しつつあるローマ法を排する」あるいは「党は我々の内外におけるユダヤ的唯物主義的な精神にたいして抗争するものである」などに明示されている反共主義、さらにユダヤ主義と唯物論的世界観との同一視とこれに対する敵対も見落とすわけにはいかない。そして最後に、「ドイツ国の強力な中央権力の創設。ドイツ全国とその組織一般のうえに超越する政治的中央議会の無制限な権威」などの全体主義的スローガンによって、ナチ党綱領は締めくくられている⁽³⁰⁾。

要するに、ナチズムとは以上に概略を述べたナチ党綱領を中核として、その周辺にさまざまな変種や時には相互に対立しかねない諸要素を含みこんだ、ある意味ではとらえどころのない雑多な思想の寄せ集めである。しかし、ナチズムがいくら雑多なイデオロギーのアマルガムであるにしても、ナチ党に入党する者はこの党綱領に示されるすべてのスローガンと要求とを承認したうえで入党するのであって、このことがナチズムのミニマム、つまり最小限度の範囲を表している。ユダヤ人に対する人種主義にかんしても、党綱領にはこれ以上のことは語られてはいない。ここには、われわれが先に引用したヒトラーの『我が闘争』に典型的に見られる狂

信的な反ユダヤ主義は、その片鱗も見られない。しかし、この党綱領に示された反ユダヤ主義は、ヒトラーやローゼンベルク流の生物学的人種主義からハイデガーの「ありふれた文化的性質」の反ユダヤ主義までも同時に含みこむような、広く漠然としていながらも、社会状況との結合の仕方いかんでは凶悪なものに発展していく可能性を秘めたイデオロギーであったことを忘れてはならない。ハイデガーの反ユダヤ主義は、直接にはヒトラーのあの偏見と妄想に満ちた反ユダヤ主義にではなくて、ナチ党綱領の反ユダヤ主義に関連すると見なければならぬ。

第三章 ハイデガーに反ユダヤ主義はあったのか

ハイデガーは1927年に『存在と時間』の前半部分を公表して、世間から圧倒的な注目を集めた後、急速にナチズムに接近していくことになる。もちろん、それまでは弱小政党に過ぎなかったナチ党へと熱い期待を寄せるようになったのは、ハイデガーに限られたことではなくて、多くのドイツ国民もまたそうであり、周知のように、ドイツの大学の多くの学生と教授たちもまたそうだったのである。こうしたナチ躍進の背景にあったものは、やはりヴェルサイユ体制と巨額の戦後賠償、そして直接には1929年に始まる世界恐慌の勃発とワイマール共和国体制への失望であった。親しい弟子たちの間でもほとんど政治的な話をしなかったというハイデガーもまた、こうした時流のなかで、ナチ革命にドイツの命運を託すようになっていったのである⁽³¹⁾。

ハイデガー家では、プロイセン陸軍大佐の娘であるハイデガーの妻エルフリーデが早くからヒトラー崇拝者であったことが知られており、また彼女はナチ時代を通じて積極的なナチ活動家であった。ハイデガーもまた、おそらくはこうした家庭環境のなかで次第にナチ党が標榜する保守革命に共鳴するようになっていったと推測される。そして、ナチにたいするハイデガーの共鳴と関与は、彼がナチの根回しのもとに1933年4月にフライブルク大学学長に選出され、5月1日の労働祭典の日を期してナチに入党したことによって決定的となる。ハイデガーはそれ以後、ナチ内部のイデオロギー闘争のなかでもまれながらも、ともかくもドイツ第三帝国滅亡時にいたるまでナチ党员であり続けたから、彼のナチ関与にかんしては疑う余地がない。しかし、ここで問われなければならないのは、それでは彼に反ユダヤ主義といえる要素が果たしてなかったのかどうか、もしあったとすればそれはいかなる程度のものであったのか、そしてそれはナチズムおよびヒトラー流の反ユダヤ主義といかなる関係にあったのかという問題である。

(1) 学長就任以前のハイデガー

ハイデガーが、ナチの勢力が台頭する以前には、通常の意味での反ユダヤ主義者でなかったことは明確である。なぜかといえば、エルジビエータ・エティンガーが明らかにしたように、ハイデガーはマルブルク大学に員外教授として勤務し始めて2年後の1924年秋に、自らが講

義する講堂のなかでまだ18歳のユダヤ人女性で後に高名な政治哲学者となったハンナ・アレントを見初めて、その後長期にわたって彼女と特別な関係をもった⁽³²⁾からである。また他方では、ハイデガーはエリーザベト・ブロッホマンというこれまたユダヤ人女性とも付き合いがあり、1918年から1969年までの長きにわたってお互いに手紙を交わし続けたからである⁽³³⁾。ブロッホマンは、2分の1ユダヤ人としてワイマールに生まれ、若いときから後にハイデガーの妻となるエルフリーデと友人であり、第一次世界大戦の間からシュトラスブルクで勉強していた関係で、新婚のハイデガー夫婦のところをしばしば訪れており、そのためにハイデガーとも親しい交友関係にあった女性である⁽³⁴⁾。もしもハイデガーがヒトラーやナチ幹部のような狂信的な生物学的人種主義的な反ユダヤ主義思想の持ち主であったとすれば、ユダヤ人女性とこうした特別でしかも持続的な関係を結ぶことはできなかったであろう。しかし、それでもなおハイデガーはナチに関与しこれに入党したことで、ある種の反ユダヤ主義とも関係せざるをえなかったのである。

ハイデガーがナチに入党する以前にも、ハイデガーのナチズムとこれに伴うある種の反ユダヤ主義の兆候は存在した。それはまず、ハイデガー自身の著作や文書のなかにはなくて、ハイデガーにかんする同時代人の証言のなかに散見される。われわれがその最も早い兆候として確認できるのは、ユダヤ系哲学者であるエルンスト・カッシーラーの夫人トーニの証言である。1929年の冬にダヴォスで開催された国際大学セミナーでハイデガーとカッシーラーは後に有名になった大論争を繰り広げたのだが、彼女はその時に出会ったハイデガーのことを回想してこう述べている。「大学セミナーはスイスの大きなホテルを会場にして、フランス、イタリア、オランダ、オーストリア、そしてドイツ全土から多くの学者が参加していた。ハイデガーが奇抜な格好で現れることは、私たちが予期していた。なにしろ彼があらゆる社会的習慣を拒否していることはよく知られていたからである。彼が同じように、新カント派、特にコーエンに敵意をいだいていることも、そしてまたハイデガーの反ユダヤ主義的傾向も私たちの間ではよく知られていた。」⁽³⁵⁾

このカッシーラー夫人トーニの証言を裏書しているのが、ウルリヒ・ジークが発見して1989年12月22日の『ツァイト』誌上で発表したことだが、ハイデガーが1929年10月20日付けでヴィクトル・シュヴェーラー宛に送った手紙である。シュヴェーラーとはフライブルク出身者で当時全ドイツ研究助成互助会の副会長をしていた人物であり、ハイデガーは、本論文ですぐ後で取り上げることになるが、当時のハイデガーの弟子でまだハイデガーとの関係が悪化していなかったエドゥアルト・バウムガルテンが同会から奨学金を得られるようにと、シュヴェーラー宛に手紙を書いたのである。この手紙の一節にはこう書かれていた。「問題なのは、われわれのドイツの精神生活に再び大地に根ざした真の諸力と教育者を供給するのか、それともこの精神生活を、広い意味でも狭い意味でも強まりつつあるユダヤ化に最終的に引き渡すかという選択の前にわれわれが立っていることを今ここでじっくり考えることです [傍点筆者]」⁽³⁶⁾。ハイデ

ガーの手紙のこの一節は、明らかに「強まりつつあるユダヤ化」という事態を明確に指摘しつつ、ドイツの精神生活にこの「ユダヤ化」をゆだねてはならないという警告を含んだものとして、ハイデガー自身によって語られた、数は少ないが明確な反ユダヤ的言辞であることは疑うことができない。ついでに言えば、「大地に根ざす」という表現のなかで用いられている「根ざす」という言葉は、当時のナチが好んで用いた概念でもあり、これの反対概念となる「無根化」と並んで、ハイデガーが後に頻繁に用いているからこそ、われわれが見逃してはならない用語であることに注意されたい⁽³⁷⁾。

まだナチに入党してはいなかったハイデガーがナチ関係者と密接に連携しながら公衆の前に姿を現したのは、1930年7月11日のことであった。この日から三日間、カールスルーエで「バーデン郷土の日」という催しがあり、そのなかの「学術・芸術・経済分野のバーデン賢人会議」で、後にナチの理論家として活躍することになるエルンスト・クリーク、後にカイザー・ヴィルヘルム研究所で悪名高い人種学研究を行ったオイゲン・フィッシャーたちと並んで、ハイデガーもまた「真理の本質について」と題する講演を行ったからである。ヘルマン・メルヘンもまた1931年の大晦日にトートナウベルクにあるハイデガーの山荘を訪問した時、ハイデガー家の全員がナチズム、つまり国民社会主義に改宗しているのを知ってびっくりしたと証言している⁽³⁸⁾から、おそらくハイデガーとナチとの蜜月時代は遅くとも1930年頃から始まっていたであろう。それとともに、ハイデガーにもある種の反ユダヤ主義が入り込まないわけにはいかなかったと推測される。

ナチズムに急速に接近したハイデガーの身边には、やがてそれまで彼と交友関係があったユダヤ系の友人たちを故意に避けようとしたり、わけてもハイデガーがユダヤ人の学生の指導を引き受けずに別の講座にこれを回したりするような状況が作り出されていく。おそらく、ハイデガーの身边に立ち込めた反ユダヤ主義の噂は、すでにフライブルクを離れて久しく、すでにギュンター・シュテルンと結婚していたハンナ・アレントの耳にも入ってきたに違いない。この噂は、ハイデガーが自分のゼミナールからユダヤ人学生を締め出し、大学でユダヤ人の同僚に出会っても挨拶せず、自分のところで博士論文を書きたいという学生を拒絶し、反ユダヤ主義者でもあるかのような態度を取っているというものであった⁽³⁹⁾。この噂に衝撃を受けたアレントはハイデガーにおそらく1932年末に手紙を書いて自らの疑念を晴らそうとしたが、この手紙は残ってはいない。しかし、1932年から1933年にかけての冬学期にハイデガーが書いたアレントへの返事が残されている。ハイデガーのこの返書はいきなり冒頭に、アレントの心をかき乱しているこの噂が中傷にすぎないと切って捨てながら、明らかにぞんざいで投げやりな調子で対応している。

ハイデガーは、自分のゼミナールがユダヤ人を締め出しているというのは、自分がこの四学期の間、ゼミナールの案内を出していないことによるのだらうと、自己弁護をしたうえで、ユダヤ人同僚に挨拶をしないという噂を「きわめて悪意ある中傷」だと一蹴し、その後こう続

けている。「僕がユダヤ人に対してどう振舞っているかの説明に、以下の事実だけをあげておく。僕はこの冬学期を休ませてもらっているので、みんなに前もって夏のうちに、僕を邪魔しないでほしい、論文そのほかは受け取らない、と言っておいた。それにもかかわらずやって来て、何が何でも学位を取らねばならないと言い立て、実際に取れるようになる、そいつはユダヤ人だ。毎月のようにやって来て、今進行中の仕事（学位論文でも教授資格論文でもない）の報告をする、これまたユダヤ人だ。数週間前、ぜひとも目を通してほしいと長大な論文を送りつけてきたのも、ユダヤ人だ。過去三学期の間、僕の後押しで研究助成会の奨学金生になった二人は、ともにユダヤ人だ。僕を通じてローマ留学の奨学金を受けているのもユダヤ人だ。これを『熱狂的な反ユダヤ主義』と呼びたい者は、呼ぶがいい。」⁽⁴⁰⁾ こうした手紙の調子には、明らかにユダヤ人学生とそうでない学生とを区別して、ユダヤ人学生だけを特定してその態度をことさらに問題にしているだけでなく、彼らの自分に対する振る舞いを明らかに迷惑なことだと見なしている様子を読み取れよう。ここでハイデガーが言う研究助成会の奨学生の一人は上記のエドゥアルト・バウムガルテンであり、もう一人はアレントのことであろうか。ローマ留学の奨学金を受けているというのは、カール・レーヴィットであろう。それにしても、奨学金の推薦状を書いたことで自分が反ユダヤ主義者ではないのだとでも言いたげな態度が節々ににじみ出ており、アレントの疑念に対して事実をあげて誠実に答えているとはとうてい言いがたい態度だと言わなければならないであろう。

次にハイデガーは、皮肉を込めた逆説的な物言いで、こう続けている「ちなみに僕は、今日大学問題において、10年前にマールブルクでそうであった時とおなじほど、反ユダヤ主義者だ。マールブルクでは、この反ユダヤ主義にたいして、ヤーコプスタールとフリートレンダーの支持さえ得ていたのだ。このことは、ユダヤ人との個人的関係（例えばフッサール、ミッシュ、カッシーラーそのほか）とはまったくかわりがない。まして君との間柄にはどんな接点もありえない。」⁽⁴¹⁾ ヤーコプスタールとフリートレンダーはともにハイデガーのマールブルク大学時代にユダヤ人の同僚だった学者であり、前者は考古学者で、後者は古典語学者であった。これら二人にハイデガーとニコライ・ハルトマンらが加わって、ギリシャの古典作品をよむために「グレカ」という会を作ったという。したがって、ハイデガーはここで、自分がもしも反ユダヤ主義者であるなら、ユダヤ人である彼らとマールブルク時代にそのような交流をもつはずがないと述べ、こともあろうに最後の文章では、自分がアレントと特別な関係をもったことが、自分が反ユダヤ主義者ではないことの何よりの証拠だと言わなければならない口ぶりなのである。これ以後二人の文通は、第二次世界大戦とアレントのアメリカ亡命を挟んで、17年間にわたって断ち切られることになるが、ハイデガーのこの手紙から受けたアレントの衝撃と心痛は察するに余りあると言わなければならないであろう。

(2) 学長時代のハイデガー

ところで、ハイデガーがユダヤ人学生に対して取った態度が果たしてどうであったのかにかんしては、ナチ時代のハイデガーにかんする貴重な証人であるマックス・ミュラーの証言がある。マックス・ミュラーは後にフライブルク大学教授となった哲学者であり、1930年に「哲学的価値学説の根本諸概念について」で学位を取得したが、ハイデガーのもとではなくて、ハイデガーが嫌っていたキリスト教哲学講座のマルティン・ホーネッカーのもとでそうしたのである。ハイデガーは彼の学位論文の副査であったにすぎず、しかも彼はハイデガーによって、キリスト教徒が真正の哲学者ではありえないことを理由に、大学教師としての就職を妨害され、大学講師になったのは第二次世界大戦後になってからであった。しかし、それにもかかわらず、ミュラーはハイデガーに悪意をもたず、むしろハイデガーの弟子であることを自称していた人物でもある。彼によれば、「しかし、ハイデガーが学長になった時期から、ハイデガーは彼のもとで学位論文を書き始めたユダヤ人学生にもはや学位を取らせはしなかった。」「ハイデガーは、1933年以後にも彼のユダヤ人学生が学位を取ることを望みはしたが、しかし、彼のもとでそうすることをもはや望みはしなかった。」⁽⁴²⁾ハイデガーの最も身近におり、かつ彼に対する憎悪によって決して目が曇らされてはいない人物の目から見ても、やはりハイデガーはユダヤ人学生に対する差別と排除を実行していたことは間違いのない事実なのである。

ついでに言えば、マックス・ミュラーはもうひとつ重要な証言を残している。「ハイデガーはこれらの人物[ユダヤ人教授のヘヴェシーとタンハウザー]にとっても敬意を払っていました。しかし、ハイデガーは、タンハウザーが正教授になった後で、こう注意をうながしたものです。内科にはもともと二人のユダヤ人医師がいただけだったが、これでどうとうこの分野には二人の非ユダヤ人がいるだけになってしまった、と。このことは、ハイデガーには何か腹立たしいことだったのである。」⁽⁴³⁾

ところで、ハイデガーがナチに入党した後、フライブルク大学学長就任式にさいして行った演説は、原書にしてわずかに十頁あまりにすぎないものであるが、詳細に分析すれば、そこにはさまざまな思想が凝縮されていることがわかる。「指導」、「服従」、「進軍」、「歩行法則」、「最も危険な最前線」、「出征する」などの軍隊用語、そして『戦争論』の著者として名高いクラウゼヴィッツの語句のわざとらしい引用はこの演説の好戦的・軍事的性格をはっきりと示しているし、「本質意志」、「指導者たち」、「共同」、「ドイツ民族」、「民族共同体への献身」、「闘争」、「民族の血と大地」などの語彙と「われわれは自己であることを意志する」などの語法、そして「国防奉仕と勤労奉仕」の強調はまさしくナチと突撃隊のスローガンにはかならない。他方でそれは、ナチ革命を歴史的「瞬間」またはカイロス（歴史的時機）と見なし、その意味が必ずしも明らかではないが、「はるかなる任務」におのれを委ねることを求め、眼前に生起しつつある出来事が歴史の「精神的付託」によって「ドイツ民族」の「運命」を「歴史」のうちへと刻印するなど、演説の基礎にはハイデガーの歴史観をはっきりと見て取ることができる。しかもこ

うした歴史観は、ハイデガーが『存在と時間』のなかで用いた彼特有の哲学的な諸カテゴリー、例えば「決意性」、「共同の決断」などの語彙のほか、「存在」は「自らを常に秘匿する」ものであるとか、「精神とは存在の本質に向けての根源的に規定された決意である」などのハイデガー哲学に独特な言い回しにまとわりつかれながら展開されている。

この演説のなかには、ヒトラー流の露骨な反ユダヤ主義的または野蛮な人種主義的言辭は明確には見られないが、ドイツ「民族の偉大さ」や「民族国家への至高の奉仕」や「民族共同体への献身」などの語彙は当時のナチズムそのもののスローガンであって、これらのスローガンは内容からすれば反ユダヤ主義を前提条件として成立したものにほかならないことは疑いを容れない。したがって、この側面からすれば、やはりハイデガーはたとえ直接にはなくても、間接的には一定の範囲で反ユダヤ主義とのかかわりをもったのだということは否定できないのである。これとの関係で、ハイデガーが学長就任演説のなかでただ一箇所だけこう述べたところがあることは、決して見逃すわけにはいかない。それは「精神とは、存在の本質に向けて根源的に調律された、知る決意性である。そして民族の精神世界とは…民族の血と大地に根ざした諸力を最も深く保持する力、すなわち、民族の現存在を最も内奥かつ広範に刺激し揺り動かす力である」⁽⁴⁴⁾という部分である。見られるように、この引用文中には順序こそ違え、「血と大地」という紛れもないナチのスローガンが姿を現している。「血」とは、当時の社会的文脈に照らして見れば、ほかならぬアリア人種の純潔な遺伝的血統という概念を意味しているし、ヒトラーの『わが闘争』によれば、この「血」が劣等であり不潔でもあるユダヤ人の血と混血されることによって、西洋文明とドイツ社会のすべての病根が生ずるとされているから、ハイデガーもまた、あからさまなかたちではないにしても、当時はこの「血」の神話を一定の範囲内で受け入れていたことはやはり否定できないのである。

さて、ハイデガーのフライブルク大学学長時代の反ユダヤ主義的言辭として明確に記録に残っているものがひとつだけある。それは、ハイデガーが先に引き合いに出したバウムガルテンにかんする所見をナチ大学教師連盟に送り、彼をいわば密告した事件のなかに登場する。エドゥアルト・バウムガルテンとは、マックス・ウェーバーの甥にあたる人物で、彼のところで学位を取得した後、アメリカ合衆国のウィスコンシン大学で学び、マディソン大学で哲学の教授として務めた経歴をもち、その後ドイツに戻ってハイデガーのもとでデューイにかんする研究を行ってドイツの教授資格をも取得しようとしていた。ファリアスによれば、ハイデガーとバウムガルテンとは住居が隣どうしであり、バウムガルテンの長男の洗礼時にはハイデガー夫妻が代父母を務めたほどの仲であったが、バウムガルテンがプラグマティズムの影響を受けた学者であったために、たえずハイデガーと彼の弟子たちから批判されていた。ある時、ゼミナールでカント哲学の解釈が議論の対決点となり、彼とハイデガーとの仲が完全に破綻したうえに、ハイデガーの助手をヴェルナー・ブロックと争って敗れたこともあって、バウムガルテンはゲッティンゲン大学に移転し、そこでアメリカの文化と哲学を講じていた⁽⁴⁵⁾。

彼の講義がとても評判を勝ち得たので、哲学部は彼を講師に昇格させようとして文部省に申請したのだが、当のバウムガルテン自身もおそらくは自らの昇格を有利にしようとしてナチへの入党を希望したらしい。これを知ったハイデガーは彼の昇格と入党を阻止しようとして、同大学のナチ教師同盟に1933年12月16日付けで次のような密告の手紙を書いたのである。「バウムガルテンは1929年から1931年まで、私の講義と演習に出ていた。……バウムガルテン博士は、親戚関係から見ても精神的な姿勢からしても、マックス・ウェーバーを中心とする自由主義的・民主主義的なハイデルベルク知識人サークルの出身である。彼は当地に滞在している間は国民社会主義者ではまったくなかった。私は、彼がゲッティンゲンで私講師になっていると聞いて驚いているが、そのわけは、彼がいかなる学問的な業績にもとづいて教授資格を得ることになったのか、理解できないからである。バウムガルテンは、私のところで失敗した後、以前はゲッティンゲンで活動しており、今は当地で免職されたユダヤ人フレンケルと活発に交流していた。私が察するに、バウムガルテンはこうしたついででゲッティンゲンで就職したのであるが、このことから彼のそちらでの現在の交友関係が説明されるであろう。私は今のところ、彼を突撃隊に採用することも大学講師連盟へ受け入れることも不可能だと考える。[傍点は原文のママ]⁽⁴⁶⁾そして、ハイデガーは、ただちに彼の入党を求めるのではなくて、その前に保護観察期間を設けるように進言したのである。

この所見には、ハイデガー個人の人格の暗部を含めて、さまざまな諸問題が渦巻いているが、本論文のテーマにとって重要なのは、自由主義・民主主義に対するハイデガーの敵対的姿勢のほかに、古典文献学者として国際的な名声をもつエドゥアルト・フレンケルをユダヤ人として名指しして、ユダヤ人と交友関係があることを根拠としてバウムガルテンの就職の道を閉ざそうとしたことである。この密告のために、バウムガルテンは一時的にはあるが大学から解職されたほか、アメリカへと送り返されそうにさえたのだが、文部省への働きかけで何とか難を免れることができた。ヤスパースは翌年になってからこの手紙の写しを手に入れたのだが、この手紙のなかで名指しされているマックス・ウェーバーのグループに所属していた彼にしてみれば、これを読んだときの衝撃はきわめて大きかったのであって、このことを当のヤスパース自身が後に語っており、第三帝国解体後の「ハイデガー裁判」ではこのことに言及したヤスパースの所見が裁判の行方にかかなりの影響力を与えたことは、周知の通りである。

(3) フッサールにたいするハイデガーのふるまい

ハイデガーが反ユダヤ主義であったのか、それでもそうではなかったのかという問題に最終的な回答を与える前にどうしても、ハイデガーの師であり、擁護者であり、また彼をマールブルクから招聘してフライブルク大学の正教授に取り立てたフッサールの証言に耳を傾ける必要がある。子どものような純真な気持ちの持ち主であったフッサールは、1917年にハイデガーと親交を深めてからは、ハイデガーに対してほとんど父親のような心情を発揮して、自分のほ

とんど唯一の理解者および後継者として非常に期待をかけていたのであり、彼をフライブルク大学に招聘するにあたってはほとんど異例というべき措置を文部省に願い出たのであった。しかし、1928年にハイデガーがフライブルクに着任してほぼ2カ月後にこの両者の関係は解消されてしまう。フッサールの言い分によれば、ハイデガーがフッサールと学問的な対話を行う機会をあからさまに回避したという。

フッサールは、帝国地方長官ローベルト・ヴァーグナーの命令によって、1933年4月14日にそのほかのユダヤ人教授たちと同様にユダヤ人であることを理由として休職の処分を受けた。この地方的な過酷な措置は、その直前の4月1日に施行されたあの「公務員職再建法」に抵触する恐れがあるとして、4月28日には廃止されたのだが、フッサールは生涯で最も沈痛な気持ちにさせられていた。フッサールは1933年5月4日付けで弟子の一人であるディートヒ・マーンケに宛てた長い手紙のなかでこう語っている。「そして最後に、それも一番つらい思いをさせられたのは、ハイデガーのことです。なぜかといえば、私は彼の才能にではなくて、彼の人柄に信頼を置いていたからです。……それに先立って、彼の方から私との交際を絶ったのです（しかもそれは、彼が招聘されてまもなくのことでした）。最近ではますます露骨になってきた彼の反ユダヤ主義がありました。—彼に傾倒していたユダヤ人学生や学部に対してもそうでした。そのようなことを耐え忍ぶのはつらいことでした。しかも、ハイデガーそのほかの『実存哲学』は一その大部分が、私がものを書き、講義で話し、そして個人的な交際を通じて示してきた思想を戯画化することから生まれています—私が生涯をかけた仕事もつ学問としての根本的な意味を転覆してしまいました。……それにしても、ここ数カ月や数週間の出来事は、私の存在を奥底の根源からえぐるようなものでした。」⁽⁴⁷⁾ 当時の事情をよく知る当事者として、フッサールのこの証言は決して無視するわけにはいかない。1936年になってフッサールからは教育を行う権利が全面的に剥奪され、彼は深い失意のうちに1938年4月に亡くなったのであるが、ユダヤ人として権利を剥奪された彼の葬儀にフライブルク大学関係者から参列した者は、戦後の浄化委員会の委員となったゲアハルト・リッターだけであって、ナチ党員であり続けたハイデガーがもちろんのこと参列者のなかに含まれるはずはなかった。

ここでフッサールに関連してハイデガーの言動に特徴的なことがあることを示すために、ひとつのエピソードを掲げることにしよう。それは、フッサールの休職処分が解除された1933年4月29日のことであった。ハイデガーの指示のもとで、ハイデガー夫人エルフリーデが自ら書いた手紙がそえられた花束がフッサール家に届けられたのである。この時フッサールとその夫人マルヴィーネはロカルノ近郊のオルセリーナに出かけて不在であり、5月1日にこの手紙は彼らのもとに転送されたという。ハイデガー夫妻のほうでは、フッサールの休職処分の取り消しという出来事にさいして、変わらぬ尊敬と感謝の念を表わすつもりであったらしいが、この手紙はかえってたくフッサール夫妻を怒らせてしまった。この手紙には、フッサールにたいする学恩と感謝の念が書き綴られ、第一次世界大戦で戦死者さえ出しているフッサール家のド

イツにたいする忠誠も讃えられたほかに、フッサールの息子でキール大学の法学教授を務めていたゲアハルトの休職処分に対する憤慨の気持ちさえ表明されていたが、肝心のフッサール本人に対する休職処分に対しては一言も述べられず、ましてユダヤ人であるという理由だけでドイツに貢献した知識人たちを解職に追い込むというそうした措置の不当性にかんしては、まったく言及されることがなかったからである⁽⁴⁸⁾。

当然のことながら、ドイツ敗戦後にフランス占領軍政府の後押しでフライブルク大学教授たちによって作られた政治的浄化委員会がハイデガーとナチとの関係を裁いた「ハイデガー裁判」では、フッサールに対するハイデガーの振る舞いと葬儀に列席しなかった非礼などがハイデガーの反ユダヤ主義と関係していなかったかどうか、かなり大きな問題として審議された。ハイデガーはこの問題にかんして苦しい弁明を行わざるをえなかったが、ハイデガーの方では、彼とフッサールとの間の不和と確執の原因にかんしては、フッサールがユダヤ民族の出であるということは意味をもってはおらず、哲学的な見解の差異が決定的であり、彼は1930年かまたは1931年のベルリンでの講演でハイデガー哲学に強く反対したことがあると述べた。どうやらこれはハイデガーの誤解らしい。これに対して、浄化委員会委員の一人であるヴァルター・オイケンが、フッサールはハイデガーが反セム主義から自分に背を向けたと理解していたという所見を述べて、ハイデガーに反論するという経緯があった。

さらに委員会では、1933年夏学期にナチ学生指導部がユダヤ人の学生団体である「ネオ・フリブルギア」を襲撃して暴力行為を働き、ハイデガーの前々学長のザウアーとオイケンらが大学評議会で加害学生に対する処分を求めたが、学長ハイデガーが肩をすくめただけでこれに返答せず、加害学生をかばったという事件についても、問題とされた。またオイケンは、ハイデガーが1933年以降多くのユダヤ人学生にたいして博士論文のための研究発表を認めず、例えばザイデマンとヘレーネ・ヴァイス嬢がそうであったと証言した。これに対してハイデガーは、自分がユダヤ人学生を排除したのはもっぱら戦術上の配慮からであり、これら二人についてはハイデガーが敵対していたキリスト教学講座のマルティン・ホーネッカーとの取り決めで、この教授のところで面倒を見させたと答えている。これは先に紹介した、ハイデガーのユダヤ人学生に対する態度にかんしてマックス・ミュラーが証言していることを裏書きするものである。フォン・ディーツェが起草した浄化委員会の最終報告書は、これらの問題にかんする見解の対立にたいして何らかの裁定を下すことなしに、多くは両論を併記するにとどめていることは断っておきたい⁽⁴⁹⁾。

しかし、われわれは、この浄化委員会による「裁判」の過程では、委員の一人であったアドルフ・ランペが、ハイデガーは人種を理由としてハンガリー系ユダヤ人のスィーラシ夫人がハイデガーの自宅に出入りするのを禁じたことと証言したこと、そして先に論じたことだが、ユダヤ人教授エドゥアルト・フレンケルがフライブルク大学に招聘されたさいに、ハイデガーが反対し、学部内でフレンケルの話が出た時に、ユダヤ人が禁止されている学部でフレンケルがやっ

て来たが、ユダヤ人が招聘されることは望まないとハイデガーが述べたとの証言があったこと、またヴァルター・オイケンが、ハイデガーは公開のスピーチで「体系の時代におけるユダヤ人の支配」や「異邦人」としてのユダヤ人について語ったと証言したことを付け加えておきたい。要するに、ハイデガーの反ユダヤ主義にかんしては、彼の有罪を示す状況証拠には事欠かないのである⁽⁵⁰⁾。

(4) ハイデガーはなぜユダヤ人教授を擁護したのか

われわれが掲げたこれらの事例に対して、ハイデガーを擁護する側からは、これらとは逆に、ハイデガーがユダヤ人教授の解職に反対したり、彼の助手を務めていたユダヤ人のヴェルナー・ブロックがイギリスへと亡命するのを手厚く助けたりした事実をあげて、われわれに反論するに違いない。確かに、ハイデガーは少なくとも三人のユダヤ人教授の解職に抗議して、バーデン州の文部省に対して行動を起こしている。これらは紛れもない事実である。ハイデガーの公式の弁明書である『1933/34年の学長職。事実と思想』、そして1966年に行われ、ハイデガーの死後に公表された『シュピーゲル』誌インタビューでも、先にも述べた優れた古典文献学者エドゥアルト・フレンケル、ハンガリー系ユダヤ人で後にノーベル賞を受賞した著名な物理化学者ゲオルク・フォン・ヘヴェシー、医学部教授ジークフリート・タンハウザーなどの事例が述べられている。しかし、一見するとハイデガーの反ユダヤ主義に反するかに見えるこうした言動にも、先のフッサール宛の花束にそえられた手紙と同様のひとつの特徴があることを見逃すことはできないであろう。

ここで、ハイデガーがユダヤ人教授の解職に抗議して行動を起こしたという事例から、ひとつだけをあげて検討することにしよう。

ハイデガーは確かに、1933年7月12日付けでカールスルーエの高等審議官であるオイゲン・フェアレ宛に、同僚のフォン・ヘヴェシーとフレンケルの一時的な休職処分に関して、これを最終的な休職処分としないように求める嘆願書を提出している。それによれば、「同僚であるヘヴェシーとフレンケルにたいしては最終的には休職処分が起ころうる状況にあります。もしもこれに対して論評することをお許しいただけるならば、私は公務員職再建法を変更の余地なく貫徹するということの必然性を十分に意識して、これを行うものです。しかし同時に、ドイツの大学と学問が世界に通用するようにこれを維持し新たに強化することに責任を負い、また配慮するということは、その名声があまりにも大きすぎる重荷と脅かしにさらされることがないということ、これに加えて、まさしく外国の精神的に指導的かつ政治的に標準となる非ユダヤ的な領域における外交上の状況をこれ以上弱めることがないということを要求します。学問的な全外国におけるフォン・ヘヴェシー氏の並々ならぬ学問的名声は争う余地がありません。同様に彼の優れた人柄も外国では広く知られています。彼を最終的に休職処分とすることは、ドイツの学問と国境にある大学の名声に重大で、長い間取り除くことができない打撃

を与えることになりましょう。」⁽⁵¹⁾そしてハイデガーはフレンケルについてもこう弁護している。「もしもフレンケルが学部に残るならば、そしてもしヘヴェシーが残るならばフレンケルもそうしなければならないのだが、一方ではわれわれの学問の国際的な名声が保持されますし、他方では大学にとって危険な要素が作り出されるということもありません。新しい帝国とその諸課題にたいする反対またはたんに無関心な姿勢という意味においてそうなのです。」⁽⁵²⁾先のバウムガルテンにかんする鑑定書で「ユダヤ人フレンケル」という名指しの反ユダヤ主義的な表現で中傷したはずの人物フレンケルをこうした意図とやり方で休職から救い出そうとしても、このことがハイデガーが反ユダヤ主義者ではなかったことの根拠には決してなりえないことはあまりにも明白であろう。

ここに見られるように、ハイデガーの言動は、ユダヤ系とマルクス主義者を公務員から排除した点で悪名高い「公務員職再建法を変更の余地なく貫徹する」という立場に立っており、そのうえでなおかつ、応用化学の分野で国際的に名高く、すでにいくつも賞の受賞者であり、そのうえロックフェラー財団から多額の資金を得ていたフォン・ヘヴェシーをフライブルク大学から失うことは、大学の利害を考えると、不利に働くという観点によって貫かれている。ここにはハイデガーが、公務員職再建法がそもそも問題を含んでいるとか、ユダヤ人をこういうかたちで公務員から排除することが問題であるなどというように、この法律とその施行にいささかでも疑問を感じているようなふしはどこにも存在しない。ここで、この嘆願書がナチ大学担当官のオイゲン・フェーアレという人物の宛てた公式の文書だからそうなのだという反論が生ずるかも知れない。

そこで、ここでブロッホマンとハイデガーとの手紙のやり取りを検討してみよう。

ブロッホマンは1933年当時はハレに居住していて、ハレの教育アカデミーの正教授を務めていたが、その彼女にも同年4月7日に施行された公務員職再建法が襲い掛かり、彼女はそのためにもまず休職させられ、その後で年金支給なしというきわめて厳しい措置によって教育アカデミー教授の地位を罷免させられたのであった。彼女は同年4月18日付けでハイデガー夫人エルフリーに手紙を書いて、その冒頭の部分でこう述べている。「私はとても辛い日々を送っていますが、このようにして追放されることがありうるとは、考えることもできませんでした。私はおそらく、精神と感情の深い共属性という確実さのなかで、あまりにもナイーブに生きてきました。だから私は最初はまったく無防備で、そしてとても絶望してしまいました。というのは、この法律の過酷さはひどいもので、私たちを今現在の仕事からだけではなく、近いうちにドイツの教育にかんするどんな共同作業からも排除するほどだからです。」⁽⁵³⁾このような親友の訴えにかんして、手紙のやり取りを見る限り、エルフリーでもハイデガーも彼女の不幸に同情して、彼女にはいかなる援助も惜しまないと約束している。

例えば、同年10月16日付けでハイデガーが外国への亡命を考え始めているブロッホマン宛にミュンヘン行きの列車のなかで書いた手紙では、ミュンヘン大学からの招聘とベルリン大学に

は行かないことを彼女に知らせながら、「私はあなたのことの全経過についてとても驚いています。そして、それでもやはり、希望をまったく捨てたくはありません」と述べている。そして、ヘルマン・ノールの学派が補充を必要としているのでドイツでも彼女の仕事の当てがないわけではなく、国内でもまだ可能性が期待できるとしながら、ただちに外国へ移住することがよいかどうかわからないと逡巡の気持ちを述べながら、「私はいつでもあなたのすべての願望と苦境を助ける容易があります」という言葉で手紙を結んでいる⁽⁵⁴⁾。しかし、こうした一見きわめて親切に見えるハイデガーの対応にもどこかそらぞらしいところがあり、彼女の境遇に同情を見せながらも、彼女がユダヤ人であるという理由だけでこうした迫害を受けている事実にはたいして一言も言及することがなく、ましてこれに憤慨したり、これが疑問だとする気持ちも示されることがない。エルフリーデの対応も然りである。やはりハイデガーもその妻もユダヤ人の公職からの追放という反ユダヤ主義的措置は当然のことか、または止むを得ないことだと考えていたことが推測される。ここでもわれわれが暗澹たる気持ちにさせられるのは、ブロッホマンが、現在もなお親友であり助けを求めている当の相手がアクティブなナチとして、今は自分たちユダヤ人を追放したり弾圧する側の一員となっていることをおそらくは知らなかったであろうということである。ハイデガーの方でも、自らがユダヤ人に対する加害者であるという自覚もまったく見られないのである。そう考えると、ハイデガーとブロッホマンの50年以上にもわたる往復書簡集を単純には「真の友情の証」とは形容できないものがあり、何ともやるせない気持ちにさせられるのは、決して私一人だけではないであろう。

これらの事例から了解されることは、ハイデガーは、アレントやエリーザベト・ブロッホマンのような、彼ときわめて個人的に親しい人物との手紙などでのやり取りのなかでも、やはり当時のナチの諸政策にたいしていささかも疑問を示すことなく、その意味ではまったく無批判に行動していたということである。また、これらの個人的なやり取りのなかでも、ヒトラーとナチ党が権力を掌握する以前にもまたそれ以後にも生じた反ユダヤ的諸事件、つまり、突撃隊によるユダヤ人やユダヤ商店などへの反ユダヤ的な暴力行為が頻発して一般の心あるドイツ人の眉をひそめさせるような出来事が日常茶飯事になりつつあったことにハイデガーがまったく言及することがなかったことも明らかである。私はこうしたハイデガーの言動と態度のうちに、彼なりの反ユダヤ主義が含まれていたと断定せざるをえないのである。

これらの事実を考慮すると、われわれは例えば彼が助手のヴェルナー・ブロックのイギリス亡命を手厚く助けたというハイデガーの「美談」なるものも、そのまま受け取ることができない。ブロックの場合にも、今まで検討したハイデガーのナチ時代の一連の言動、とりわけフライブルク大学学長時代の言動を総合すると、ハイデガーがユダヤ人の助手の個人的運命に心から同情して手厚い友情を示したというよりは、ナチのアクティブな黨員学長である自分のそばにユダヤ人がいることにたいする非難を恐れて、そのような政治的戦略のもとにいてよく彼をイギリスへと追い払ったのだと解釈する方が理にかなっているように思われる。

(5) 1934年夏学期の「論理学講義」

本章の最後に、ハイデガーの人種にかんする考え方が示されている数少ない講義記録のうちから、彼の学長辞任直後の1934年の夏学期に行われた講義『言葉の本質への問いとしての論理学』を取り上げてみよう。この講義は、当初の講義概要では「国家と学問」というタイトルになっていたが、ハイデガーは予告なしに、つまり第一回目の講義の冒頭に突然今回はタイトルを変更し「論理学」を講義すると述べて、聴講者たちを驚かせたほか、彼の講義を聴講しようとして訪れていた数人のナチ幹部を憤慨させたという。

ハイデガーがこの論理学講義で意図したのは、論理学という表題を掲げながら、従来の規範としての論理学を叙述するのではなく、むしろこの論理学を動揺させることである。つまり、論理学の問いを「言葉への問い」へと変容し、そこからさらに「人間とは何か」という問いへと迫ろうとするのである。ハイデガーは人間の本質を問いながら、さらに「われわれ自身は誰であるか」という問いへの答えとして、われわれの本質を「民族」と関係させようとする。したがって、ハイデガーのこの講義の概念装置は、依然として当時のナチズムの射程内にあり、そのなかを動いていることがわかる。

さてハイデガーは、「われわれ自身は誰か」という問いにたいして、われわれは「決断」を通じて、われわれを超えて、民族という共同の帰属へと引き入れられると述べた後、多様な「民族 Volk」の概念を、「身体としての民族」、「魂 Seele としての民族」、「精神としての民族」の三つに整理して、それぞれに説明を加えている。このうち、「身体としての民族」にかんする説明のなかで、明確に「人種」が語られている。

ハイデガーはそのなかで例えばこう述べている。「しばしばわれわれは『民族』という語を(例えば、『民族運動』という言い回しにおいてそうであるように)『人種』という意味でも用いる。われわれが『人種』と名づけるものは、民族の構成員やその種族の肉体的・血縁的關係とかかわっている。『人種』という語と概念は『民族』に劣らず多義的である。両者は関連し合うから、それも偶然ではない。『人種』は、遺伝や遺伝血縁関係や生命衝動といった意味での、血にかかわる事柄としての人種的なこと Rassisches だけを意味するのではなく、同時にしばしば血統がいいこと、洒落たこと Rassiges をも意味する。だが、この後者の言葉は肉体的な性状に限定されない。……最初の意味での人種的であることは、決して血統がいいこと、洒落たことである必要はなく、むしろそれはひどくみすぼらしい unrassig ことでもありうる。」⁽⁵⁵⁾われわれはここでハイデガーがヒトラーやローゼンベルク流の人種主義を展開しているとは思わない。しかし、ハイデガーがそのほかの箇所で、例えば「確かに飛行機が総統をミュンヘンからムッソリーニがいるヴェネチアまで乗せて行くとするれば、歴史は生起する。飛行はひとつの歴史的に生起した事柄である。しかし、機会の運動はそれではない」⁽⁵⁶⁾、「国家は民族の歴史的存在である。……任務と委任から生じ、また逆に労働と仕事へと生成する支配意志が貫徹される限りにおいてのみ、そしてその範囲においてのみ国家は存在する」⁽⁵⁷⁾、「社会主義はわれわ

れの歴史的存在の基準と本質構造への関心を意味するのであり、それゆえに社会主義は、天命と仕事に応じた序列を欲し、それぞれの労働の侵すべからざる榮譽を欲し、また存在の不可避性へとかかわる基本的関係としての奉仕の無条件性を欲する」⁽⁵⁸⁾などと述べている。

これらの引用からただちに了解されるように、国民社会主義と突撃隊そのもののスローガンが強くこだましている文脈のなかで見れば、ここでハイデガーが念頭においている「人種」とは、決してヒトラーとローゼンベルクの人種理論と相容れないものとはいえず、むしろ、これと決して同一ではないとしても、少なくともこの粗雑で狂信的な生物学的・人種的世界観のうえに立つ反ユダヤ主義を許し、これを黙認するか、またはこれを包摂しうる内容をもつものであったと言わざるをえない。この年の6月末、つまりハイデガーのこの「論理学講義」が進行するさなか、ナチス内部の左派であり、行動主義的・民衆主義的であるとともに、「国民社会主義」の「社会主義」的路線を主張し続けた突撃隊長レームの一派がヒトラー派によって粛清されたことを考え合わせると、紛れもなく人種への言及を含んだこの講義がもつ意味は決して小さくはないであろう。そして、われわれはついでにこうも言わなければならない。ハイデガーは『シュピーゲル』誌インタビューのなかで「学長を辞任した後、私は講義という私の使命だけに専念しました。私は1934年夏学期に『論理学』を講義しました。…聴く耳をもっていた者はみな、これがナチズムとの対決であったことを聞き取りました」⁽⁵⁹⁾と述べたが、上記の引用に照らして見れば、このこともまた真っ赤な嘘であったことがわかるのである。

結論にかえて

これまで検討してきたように、ハイデガーが反ユダヤ主義者であったのかどうかという問いに答えるには、その前にまず反ユダヤ主義および反ユダヤ主義者の定義と基準が問題とならなければならない。それは、定義されないままのかたちでは、ドイツにこれ以上ユダヤ人が増えないでほしい、またはユダヤ人が数多く入り込んでいた出版・報道・芸術などの文化領域と商業・貿易・銀行などの経済的分野から彼らの割合が少なくなって欲しいというような程度のユダヤ人への素朴な反感から、ヒトラーの『我が闘争』のなかで示された狂信的な反ユダヤ主義の思想、すなわちヨーロッパの諸悪の根源をユダヤ人の存在に求め、政治経済の混乱の原因がアリア人の遺伝的な血統にユダヤ人の血が混血することにより、国際的なユダヤ人の陰謀家集団がヨーロッパを締め付けていて、しかもこれが共産主義またはボリシェヴィキ集団ともつながっているとし、ユダヤ人の人種としての根絶さえも主張するような、常軌を逸した反ユダヤ主義までにいる、多種多様な変種を含みうるからである。後者のような生物学的・人種主義的思想が反ユダヤ主義であることは明確であるとはいえ、前者のようなユダヤ人にかんする素朴な反感がたとえ存在したとしても、この感情の持ち主がユダヤ商店のボイコットなどの直接的な行動を取らない限り、こうした感情の持ち主までを反ユダヤ主義者と決め付けるわけに

はいかないであろう。もしもそのように決め付けることが正当であるとすれば、ナチ時代にはユダヤ系以外のドイツ人のほとんどが反ユダヤ主義者となり、ハイデガーもまた明らかにこれらの人々のなかに区分されることになろう。それでは、反ユダヤ主義の立場とそうでない立場とをいかなる基準において区別することができるであろうか。

この問いに答える前に、そしてこの問いに答えるために、クローディア・クーンズが引き合いに出している興味深い事例を検討してみよう。1960年代になってから、遺伝学者ベンノ・ミュラー＝ヒルが第三帝国時代にナチの御用生物学者だった人物とその家族をインタビューした時、彼らは自分たちが反ユダヤ主義の持ち主であるとはまったく思っていないことを強調したという。かつてナチであり、ハイデガーの友人でもあり、あの悪名高いカイザー・ヴィルヘルム人類学・人類遺伝学・優生学研究所の所長であったオイゲン・フィッシャーの娘は、このインタビューで彼女の父親と同僚であった一人の人物が反ユダヤ主義者であったのではないかと尋ねられて、こう答えたという。「もちろんそんなことは絶対にありません。その人は私の父と同じです。その人は『ユダヤ人は悪い』と言ったことはありません。彼はただ『ユダヤ人はわれわれとは違った存在だ』と言っただけです。」そしてほほ笑みを浮かべながら、彼女はこう続けたという。「彼はユダヤ人の分離を支持したのです。1927年に私たちがベルリンにやって来た時、いったいどんな状態だったか、お分かりですか。映画、演劇、文学は全部ユダヤ人が握っていたんですよ。彼は分離に賛成でした。でも反ユダヤ主義者ではありませんでした。」⁽⁶⁰⁾ ドイツ人からユダヤ人を分離したことが決して反ユダヤ主義を意味するものではないという彼らは、自らが反ユダヤ主義者であるとは認識または自覚できていなかったのである。こういう事態をどのように考えればよいであろうか。それでは、反ユダヤ主義とはヒトラーとナチの幹部または絶滅収容所で直接にユダヤ人を虐殺した人々だけが責任を負うべきなのであろうか。

他方では、アメリカの歴史学者ダニエル・ゴールドハーゲンは、ヒトラーの個人的意志やナチの政策がホロコーストを引き起こしたというよりも、キリスト教のなかで長い間に醸成されてきた反ユダヤ主義が19世紀から20世紀にかけてドイツ社会に広く深く浸透して、ごく普通のドイツ人までもがユダヤ人を抹殺することをためらわないという風潮を生み出し、これがあのユダヤ人の大量虐殺の原因をなしたのだと主張して、大きな論争を呼んだ。彼は例えばこう述べている。「反ユダヤ主義は、それが時間の変化に応じて展開してきたにもかかわらず、19、20世紀を通じてドイツ文化の公理として働いてきたこと、またナチ時代におけるその優越的形態は、広汎に受け入れられてきた基本的な範型の形態をいっそう引き立て、強化し、練り上げたものにすぎないという、疑いようのない証拠が存在しているのである。」⁽⁶¹⁾ 「これらの章での結論は、ナチ期のドイツでは、ほとんど普遍的なまでにユダヤ人に対する概念化が存在していたということであり、それは『抹殺主義者』イデオロギーとでも呼ぶうるもので、すなわちユダヤ人の影響は本来的に破壊的なものであって、社会から逆転できないまでに抹殺されなければならないという信念を形作っている。」⁽⁶²⁾ このゴールドハーゲンの歴史観に従えば、ハイデ

ガーもまたナチ学長として普通のドイツ人以上のドイツ人であったのだから、ヒトラーと同じような抹殺主義者であったのだという結論になりかねないであろう。しかし、ナチ時代のドイツ人をそのように結論付けることは性急の誘いを免れないであろうし、ハイデガーにかんしてもそのように結論付けるに足る証拠が残されているわけでもない。

これらの両極の事例の検討から、私はナチズムおよび反ユダヤ主義を区別するひとつの重要な基準または境界線として条件を満たすものは、やはり1920年に立案されて第三帝国崩壊まで変化することのなかった「国民社会主義ドイツ労働者党綱領25条」であると考えている。すでに、本論文第2章で述べたことだが、とりわけその第4条にはこう規定されていた。「民族同胞である者に限り、国家公民であることができる。信仰の如何を問わず、ドイツ人の血統をもつ者に限り、民族同胞であることができる。したがって、ユダヤ人は民族同胞とはなりえない。」そして、これに第6条「国家の執行および立法の決定権は国家公民にのみ与えられる」が続き、さらに第7条「国家の全人口の食料を満たすことが不可能な場合は、他の諸国民にぞくする者（非国家公民）はドイツ国から追放されるべきである」が続いている。すでに述べたように、ここでは、大ドイツ国家建設という民族主義的要求と不可分に、ユダヤ人から公民権ばかりか土地と財産をも剥奪しようとする要求が結合しており、ここにすでに東部地域への領土拡大という第二次世界大戦への布石があり、東部地域占領に伴って生ずるユダヤ人の問題の最終解決としての人種の抹殺への布石がある。ナチ綱領のこれらの部分はヒトラーとその幹部らによるホロコーストの萌芽的部分であり、ホロコーストの即自的形態であるといえよう。国家国民としての資格が剥奪されるということは、国家という後楯を失うことであり、国家として保護される権利を失うということだからであり、彼らが絶滅収容所へと連行されることを押しとどめる何ものをも失うということだからである。

以上の観点から考察する限り、ナポレオンによるゲットーの解放以来、100年以上にもわたってたんにドイツに居住したばかりでなく、キリスト教に改宗して宗教的・文化的にもドイツ国民に完全に同化した人々、自らドイツ人をもって任じて第一次世界大戦においてドイツを守る戦争に従軍した人々を含めて、ドイツ国内のすべてのユダヤ人とドイツ人と「分離」した者、つまり、彼らがユダヤ人であるという理由だけで民族同胞から排除し、しかも国家公民としての資格と権利を剥奪するというこのナチ綱領に賛同して入党し、たとえ一時期ではあってもナチとして積極的に活動した者、そしてたとえユダヤ人の虐殺に直接に手を下したわけでないにしても、ヒトラーとナチ帝国の反ユダヤ的な諸政策と一連の措置に疑いすらいなくことなく、ナチへの忠誠心を最後まで失わなかった者、これらの者こそが反ユダヤ主義者と呼ばれるべきであろう。

ハイデガーが、ヒトラーやローゼンベルクの意味でのきわめて粗雑な生物学的・人種的な反ユダヤ主義の信奉者ではなかったことは確かである。しかし、本論文においてこれまで指摘してきたように、ナチの政権奪取直後からきわめて激しくなったユダヤ人およびユダヤ人商店な

どに対する差別と暴力が渦巻くさなか、上記の反ユダヤ主義を含むナチ綱領を承認して自ら進んでナチに入党し、フライブルク学長としてまず、ユダヤ系および国家にとって望ましからざる人物を公務員および大学から排除することを意図した「公務員職再建法」の不当性にいささかも異議や疑問さえさしはさむことなく、いくつかの例外はあったにせよ、むしろこれをきわめて忠実に学内において実行し、しかもたとえ政治的配慮からであったにしろ、自分の周りからユダヤ人とユダヤ人学生を遠ざけたこと、数は少ないが、一定の範囲において紛れもなく反ユダヤ的言辞を用いていたこと、さして私の知る限り、ナチ時代の一連の過酷な反ユダヤ的諸立法・政策・措置に対して、ハイデガーの言動にはいささかの反対もなく、また公式的にはいささかの疑念すら見られないこと、これらのことは明らかである。そうだとすれば、ハイデガーもまた立派な反ユダヤ主義者であったという結論は揺るぎのないものであろう。

ハイデガーの反ユダヤ主義は、確かにヒトラーやローゼンベルクのそれと同一のものではなく、むしろ普通のドイツ人が抱いていたのと同様の反ユダヤ主義であったと思われる。しかし、それは、ナチ時代のハイデガーの言動全体から見れば、普通のドイツ人の反ユダヤ主義と同じように、ヒトラーとローゼンベルクのあの狂信的で憎悪と偏見に満ちた非人間的な反ユダヤ主義と決して両立せず、また相容れないというようなものでは決してなくて、むしろこれと矛盾しないもの、言い換えればこれと親和性のあるものであった可能性が強いことを、最後に指摘しておくべきであろう。

2009年1月14日

注

- (1) マルティン・ボルマン『ヒトラーの遺言』原書房, 127頁。
- (2) 同上書, 153頁。
- (3) 同上書, 159頁。
- (4) ユダヤ民族がはじめて民族としてのまとまりを形成したのはヤコブの時代だったといわれる。これがいわゆる12部族であった。この時点ですでにさまざまな人種の混交があったことは想像するに難くない。モーゼに率いられてエジプトを脱出したイスラエルの人々には多くのエジプト人もまた混じっていたといわれる。
- (5) パウロ「コロサイ人への手紙」第3章9-11。
- (6) ポール・ジョンソン『ユダヤ人の歴史』上巻, 徳間書店, 64頁。
- (7) 同上書, 223頁。
- (8) アブラハム・レオン『ユダヤ人と資本主義』法政大学出版局, 106頁。
- (9) ポール・ジョンソン『ユダヤ人の歴史』上巻, 227頁以下を参照。
- (10) 「ヨハネによる福音書」8. 44。
- (11) ユダヤ人の虐殺を意味するポグロムという言葉はもともとロシア語である。このことは実際のポグロムがロシアで初めて大規模に行われたことを意味する。
- (12) アリストテレス『政治学』(アリストテレス全集第15巻, 岩波書店), 28-29頁。
- (13) 同上書, 296頁。
- (14) アブラハム・レオン『ユダヤ人と資本主義』, 157頁。
- (15) ヒトラー『我が闘争』上, 角川文庫, 96頁。
- (16) 同上書, 406頁。

- (17) 同上書, 436頁。
- (18) ロベルト・S・ヴィストリヒ『ヒトラーとホロコースト』ランダムハウス講談社, 92頁以下を参照した。
- (19) ヒトラー『我が闘争』上, 448頁。
- (20) 同上書, 451頁。
- (21) ヒトラー『我が闘争』下, 350頁。
- (22) 同上書, 352頁。
- (23) 同上書, 407頁。
- (24) Heidegger, Einführung in die Metaphysik, Gesamtausgabe Bd. 40, S. 40-41.
- (25) Ibid., S. 41-42.
- (26) Ibid., S. 45.
- (27) Ibid., S. 50-51.
- (28) Ibid., S. 53.
- (29) Vgl. Walther Hofer (Hrsg.), Der Nationalsozialismus. Dokumente 1933-1945, Fischer Bücherei, S. 28.
- (30) Ibid., S. 30-31.
- (31) 奥谷浩一「ハイデガーと国民社会主義」(『札幌学院大学人文学会紀要』第84号, 2008年11月)を参照されたい。
- (32) Vgl. Elzbieta Ettinger, Hannah Arendt · Martin Heidegger, Yale University Press.
- (33) Vgl. Martin Heidegger · Elisabeth Blochmann · Briefwechsel 1918-1969, Marbach am Neckar, 1990.
- (34) Martin Heidegger · Elisabeth Blochmann · Briefwechsel 1918-1969, Marbach am Neckar, S. 121, 131-134.
- (35) Guido Schneeberger, Nachlese zu Heidegger, Bern, S. 7ff. ここで言及されているコーエンとは、新カント主義のマルブルク派で知られるヘルマン・コーエンのことである。彼もユダヤ系ドイツ人であった。
- (36) Rüdiger Safranski, Ein Meister aus Deutschland. Heidegger und seine Zeit, Carl Hanser Verlag, S. 299.
- (37) ハイデガーの学長演説に見られる「根ざすこと」および「無根化」については、本論文139頁と注(44)を参照されたい。
- (38) Otto Pöggeler, Praktische Philosophie als Antwort an Heidegger, in Bernd Martin (Hg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 84.
- (39) Elzbieta Ettinger, Hannah Arendt · Martin Heidegger, p. 52-53.
- (40) Hannah Arendt/Martin Heidegger Briefe 1925 bis 1975 ind andere Zeugnisse, Vittorio Klostermann, 1998, S. 68-69. (『アレント＝ハイデガー往復書簡1925-1975』みすず書房, 54頁)
- (41) Ibid., S. 69. (同上書, 同頁)
- (42) Ein Gespräch mit Max Müller, in Bernd Martin (Hg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 106.
- (43) Ibid., S. 105.
- (44) Heidegger, Die Selbstbehauptung der deutschen Universität, Vittorio Klostermann, 1983, S. 14.
- (45) Victor Fariás, Heidegger und Nationalsozialismus, S. Fischer, S. 283.
- (46) Ibid., S. 283-284.
- (47) Hugo Ott, Martin Heidegger. Unterwegs zu seiner Biographie, Campus Verlag, S. 175.
- (48) Vgl. ibid., S. 169-170.
- (49) Vgl. Bericht über das Ergebnis der Verhandlungen im Bereinigungsausschuß vom 11. und 13. Dez. 1945, in Bernd Martin (Hg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 106.
- (50) Ibid., S. 195-197.
- (51) Heidegger Gesamtausgabe Bd. 16, S. 140.
- (52) Ibid., S. 141.
- (53) Martin Heidegger · Elisabeth Blochmann · Briefwechsel 1918-1969, S. 64.
- (54) Ibid., S. 77.
- (55) Heidegger Gesamtausgabe Bd. 38, S. 65.
- (56) Ibid., S. 83.
- (57) Ibid., S. 165.
- (58) Ibid., S. 165.

- (59) Spiegel-Gespräch, "Spiegel", Nr. 31. Mai 1976.
- (60) クローディア・クーンズ 『ナチと民族原理主義』 青灯社, 300頁。
- (61) ダニエル・J・ゴールドハーゲン 『普通のドイツ人とホロコースト』 ミネルヴァ書房, 40頁。
- (62) 同上書, 57頁。

Heidegger and Anti-Semitism

OKUYA, Koichi

Abstract

It is now well known that Heidegger, the world-renowned philosopher, was a member of the Nazi Party from 1933 until the fall of the Third Reich in 1945. However, the dispute over questions of to what degree he was active with the Nazis and adopted Nazism's ideology are still unresolved. Of particular importance is the question of whether Heidegger was involved in the anti-Semitism that supported the Nazis' barbaric Holocaust, a singular event in human history in which approximately six million Jews were killed in extermination camps. It is clear that he did not hold to the fanatic biological and racial anti-Semitism of Hitler. However, if one analyzes Heidegger's words and actions carefully, one understands that the seeds of anti-Semitism were planted in him to some extent.

This paper examines the origins and history of anti-Semitism and the Nazis' anti-Semitic ideology in order to demonstrate this.

Keywords: Anti-Semitism, Holocaust, Anti-Semitism myths, Reconstruction law of civil servants

(おくや こういち 本学人文学部教授および人文学部長 哲学・倫理学専攻)